
IS-戦いを求めるもの

志祈月織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - 戦いを求めるもの

【Nコード】

N3918X

【作者名】

志祈月織

【あらすじ】

戦いが好きだ。戦って、戦って、戦いあいの末に、戦いたい。だから、あの日出会った彼女はまさに運命だった。俺より強く、凛々しく、美しい。俺は、彼女に勝つために銃を取り、技を磨き、戦略を学び、すべてをかけて戦った。直向に彼女を求め、それはいつしか愛情となった。

ISで主人公の二次創作です。一夏の幼馴染という設定です。テンプレ、ハーレム要素、最強、ご都合主義を含むのでご注意ください

さい。

途中で更新が停止したらごめんなさい。

再会と再開（前書き）

投稿するのが初めてなので不備があれば教えてください。
あと、感想はどんどん募集しております

再会と再開

「全員揃ってますねー。それじゃあSHRはじめますよー」

そう、につこりと微笑むのはこのクラスの副担任、山田真耶だ。

高校一年生である俺と同じか、それよりも幼く見える彼女は、まるで子供が大人のマネをしていますよ、といった風に教室を見回す。

「それでは皆さん、一年間よろしく願います」

どちらかといえば、こちらがよろしくする側ではないだろうか。

と山田先生の姿にそう考えてしまう。

教室中が俺と同じ考えなのか、それとも別の理由からだろうか。

クラスの誰も反応を返さない。

おそらく、二対八くらいで後者の割合が多いだろう。

「え、えつと……。じゃ、じゃあ自己紹介をしましょうか。出席番号順に願います」

その場の沈黙に耐えられなくなったのか。山田先生はうるたえながらそう告げた。

まったくもって、教師に思えない。

まあそれはそれでおもしろい。それに、その小動物を思わせる姿は年不相応にかわいい。これは、年齢より幼いという意味だ。

もっとも、俺よりも前方。クラスの真ん中最前列というお誕生日席に座る友人、織斑一夏はそんなことないらしく、引きつった顔で居心地悪そうに座っている。

ちらりと、幼馴染である篠ノ之箒に助けを求めるが、無視される。それにいつそ落ち込む一夏だが、まあ無視された理由には思い至ってないだろう。

まあ、俺個人としてはおもしろいから問題はない。だいたい、一夏もだらしなない。せつかくこんなおもしろい状況に置かれたのだ。少しは楽しめばいいものを。

と教室中を軽く見回すが、俺と一夏以外の生徒は女子ばかり。そ

れだけではなく、この学校すべてを見ても、男子は俺と一夏だけ。他はすべて女子なのだ。

こんなハーレム状況。楽しむな、というほうが無理な話だ。

「……あの、織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!？」

山田先生の声に、一夏は声を裏返しながら答えた。

どうせ、現実逃避でもしていたのだろう。

「あ、あの、お、大声だしちゃってごめんなさい。お、怒ってるかな?」

とひたすらに頭を下げる山田先生。うむ、教師とはとても思えない。まるで一夏にいじめられて謝っているみたいだ。

「いや、あの、そんなに謝らなくても。自己紹介ですよ。します、しますから……」

なんとか山田先生をなだめる一夏。これじゃ、どっちが年上だかわからないな。

一夏は立ち上がると、こちらを振り向いた。

「え、えっと。織斑一夏です。よろしくお願いします」

そう、当たり前障りのない無難なあいさつから始めるのだった。

振り返れば俺たちがここ、IS学園にいるのは一夏が原因だろう。本来、俺たちは私立藍越学園に入学するはずだった。

俺としては高校などどこでもよかったのだが、一夏がそこを受験するといったので、俺もそこにしただけだ。深い理由などない。

なので受験会場やその他諸々などは特別調べることもなく、すべてを一夏に任せて受験会場へと向かった。

そこで運がいいのか悪いのか、一夏と俺はISを起動させてしまったのだ。

インフィニット・ストラトス。通称、IS。

簡単に言えば、この世で最強の兵器だろう。まあ、それに色々異

論はあるのだが、世間一般の評価といえはそんなもんだ。ついでに女性しか起動できないといわれていた。

そう、過去形だ。俺と一夏がISを起動させたことでその常識は壊された。

その事実在世間や国、つまるところ世界を大きく震撼させた。

俺たちはそのなんだかんだといったゴタゴタの中、本人たちもよく知らないさまじな思惑があり、その結果としてこのIS学園に入学させられたのだ。

すごい大雑把な回想を終える、一夏はまだ立っていた。先ほどかなにもいっていない。

教室中が一夏に注目をする。期待が高まる中一夏は、「以上です」

何人かがずっこけた。俺としてはまあ、予想通り。あいつがこの空気の中、おもしろいことをいうことなどできない、という程度には幼馴染であるあいつのことを理解している。

バアンツ！

突然響いたその音。それは、いつの間にか教室にいた人物が、一夏を出席簿で叩いた音だった。

「げえっ、関羽！？」

バアンツ！と二撃目。すばらしい一撃だ。惚れ惚れする。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

はたして、その人物は誰かというと、なんてことはない。織斑千冬、一夏の姉だ。このクラスの担任になることは聞いていたが、遅かったな。

「あ、織斑先生。もう会議は終わっただんですか？」

「ああ、山田くん。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」
どうも、遅れたのはそういう理由らしい。

「い、いえっ。副担任ですから、これくらいしないと……」

先ほどより熱っぽく話す山田先生。

なるほど、この先生も千冬の信者かなにか。

千冬は世界中のIS乗りの憧れで理想だ。山田先生のような反応をする人は初めてではない。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てる二が仕事だ。私のいうことをよく聴き、よく理解しろ。出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は若干十五才を一六才まで鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私のいうことは聞け。いいな」

いきなりの暴力宣言。教師というより、前にやっていた軍の教官に近いな。

「キヤー！千冬様、本物の千冬様よ！」

「私、千冬様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私、お姉さまのためなら死ねます！」
とこんな感じだ。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだな。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるか？」

本気でうつとうしがる千冬。そんなことなど気にも留めず、

「きゃああああつ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躰けて！」

このクラスはDMの集まりらしい。

「で？挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は……」

バアンツ！と三度出席簿が振り下ろされる。

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

とこんなやりとりすをすれば、教室には二人が姉弟だとバレるのは当然。

「え……？ 織斑くんって。あの千冬様の弟……？」

「それじゃあ、世界で一人目の男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

「ないよ。一夏も俺も、ISが使える原因は不明とされてるが、俺は大体の予想はついてる。おそらく、千冬もだ。一夏は、まあ気づいてないな。」

あと、どういつもこいつも千冬に幻想持ちすぎ。一度、家でのくうたら具合を見せてやりたい。

「おい、そこでニヤついている馬鹿者」

「……俺か？」

どうも、表情が表に出ていたようだ。別に隠す気もないけど。

「そうだ。ついでお前も自己紹介をしろ。いっておくが、マジメにやれよ」

その千冬の目は、ふざけたらどうなるかということ物語っている。さすが、千冬。俺のことをよくわかってる。俺がこの状況で、どういう行動をとるかということはお見通しというわけだ。

なら、その期待に応えるでしょう。

「みなさん、はじめまして。師河美鶴です。一夏と同じく、男ですがよろしく願います」

教室中の視線が、俺に集中する。うん、悪くない。

「好きなものは女の子。趣味は女の子をナンパすること。将来の目標はハーレム建造です。叱って罵って優しくして馴れて欲しい人は、俺に一声かけてください」

一瞬の沈黙。そして、

「キヤー！！ 肉食系よ、肉食系男子だわ！！」

「すごい、かつこいい。馴れて欲しい！」

「あの、今晩暇ですか！？」

などと教室から歓喜の悲鳴が上がった。今更だが、この教室にはバカしかいないのではないだろうか？

そんな中、千冬は静かに俺の席まで歩いてくると、

「マジメにやれといっただろうが、馬鹿者！」
出席簿を振り下ろした。

俺としてはこうなるだろうことはもちろん予想していたので、身を捻りそれを避ける。

「……避けるな」

「だって、当たったら痛そうじゃん」

現に、風圧だけで前髪が少し切れた。一夏へのものより、明らかに殺傷力が高い。

「……ふん」

もう一撃。俺はそれを机の上にあつた入学案内書を丸め、筒状にして受け止める。

「おいおい、危ないな。なに怒ってるんだよ？」

「教師として、生徒が不真面目な態度を取ったら指導するのは当然だ」

「体罰だろ、これ」

「訴えられなければ問題ない」

と会話する間も、出席簿と筒で打ち合う。

やばいな、強度的にこっちが負けそうだ。

「う、うそ。千冬様と互角に戦っている？」

「何者なの？」

そんな声も無視。そんなことよりも、今は千冬に集中する。千冬だけを、見つめる。

「ニヤニヤするな、馬鹿者が！」

それは無理だ。こんな楽しいのに、笑みを抑えるなんてできない。

互いに、速度を増していく。そして、

「……時間切れか」

「それは残念だ」

鳴り響くチャイムの音で終わりを迎えた。

ダメだ、不完全燃焼過ぎる。こんなじゃ、ぜんぜん満足できない

いな。

「さて、これでSHRは終わりだ、師河、座れ」

「おいおい、冗談じゃないぜ。お楽しみはこれからだろう。千冬だって、まだ満足してないんだろう？」

「織斑先生だ。もう一度だけだ。座れ」

有無を言わせぬ千冬の口調。それに、俺も幾分か冷静さを取り戻す。

俺は大きく息を吐き、頭を冷やす。まったく、俺とすることが。高校生活初日ということで、気が大きくなっていたようだ。これだから、両親からはまだ子供扱いをされるのだろう。

「っとまあ、このように腕にも少し自信があります。みなさん、これからよろしく願います」

そう締めくくり、俺は座るのだった。

挑むものと立ち向かうもの（前書き）

セシリアの性格がかなり改変されていると思います
そっというのが嫌いな方は気をつけてください

挑むものと立ち向かうもの

そんなこんなで休み時間。この学園は始業式だというのにいきなり授業がある。まったくもってめんどくさい。

そして廊下。俺と一夏を見物に、学校中から生徒が集めつていようだ。当たり前だが、全員女子。

「落ち着かない」

そう零すのは一夏。俺は一夏の机に座り、答える。

「なにが？」

「なにが、じゃねえよ。見ろよ、廊下」

俺は廊下に笑顔で手を振ってやる。そして響き渡る歓声。

「うん、みんなかわいいな」

「なんでお前はそんなに余裕なんだよ……」

疲れたように、うなだれる一夏。

「おいおい、だらしがないな。一夏も男なら少しはこのハーレムを楽しめよ。あれだ、適当に女の子に声かけて飯でも誘うとかさ」

「出来るか、そんなこと！」

だらしがないやつめ。そうやって女子に近づこうとしないからいつまでも女心が読めない鈍感野郎なんだ。

「……ちよつといいか」

「え？」

「ん？」

突然、声をかけられた。さてさて、この衆目の中思い切った行動をするな。

「……箒？」

「よつ、久しぶり」

その正体は、六年ぶりに会う幼馴染、篠ノ乃箒だった。不機嫌そうな顔の幼馴染にまずは一言。

「元気してたか？ 相変わらず景気悪そうな顔だな」

「余計なお世話だ！　というか、なんでそんなに軽いんだ、お前は」
なんでもなにも、幼馴染に対して硬くなる必要もないだろう。それに、筈のお目当ては俺じゃないんだし。

「一夏、話がある。いいか？」

「俺だけ？　美鶴には？」

相変わらずの鈍感さ。ここは手助けしてやろう。

「その、美鶴は、だな……」

「俺は少し用事があるんだよ。お前だけでいつて来い。筈、また後で話そうぜ」

「あ、ああ。そうだな」

俺は立ち上がり、二人を廊下を送り出す。まっ、どうせ当たり障りのない会話で終わりだろう。一夏の鈍感さもさることながら、筈も案外ヘタレだからな。

「それで、何か御用ですか。お嬢様？」

「ええ、もちろん。ちよつと、よろしいかしら？」

振り返ると、そこには金髪美少女が立っていた。気の強そうな瞳で、俺を見ている。

「もちろん。俺は女性のお誘いは断らない主義なんですよ」

「相変わらずの八方美人ですわね。いつか背中から刺されますわよ」

「それは怖い。せいぜい、気をつけるとしましょう」

そう、俺はにこやかに笑った。

「あと、いい加減その他人行儀な話し方はやめてくださるかしら。不快ですわ」

「はっ、最初に言葉使いに気をつけろっていったのはそっちだろ。お嬢様」

俺はがらりと口調を変える。別に、下手に出る理由もないし。

「そのお嬢様、というのはやめてくださるかしら。わたくしにはセシリア・オルコットという名前があるのです」

知っているよ。イギリスの代表候補生で専用機持ち。今年の一年生の中でも指折りのエリートだ。そして、俺の顔見知り。

「ははっ。元気そうだなによりだな、お嬢様。それに、予想通り美人になった。俺の女を見る目は確かだったか」

「お褒めにいただいて光栄です。あなたに認めてもらうため、研鑽を積みましたから」

「ああ、代表候補生になったんだろ。おめでとう、お嬢様」

「そう思うなら、いい加減に名前で呼んでくださいますか」

名前で呼ぶ、というのは昔交わした約束のことだ。お嬢様が、俺を惚れさせるくらいイイ女になったら名前で呼ぶというものだ。なぜそんな約束をしたかというと、過程は色々あるが、結論としてはお嬢様が俺に惚れたから。それを俺が拒否したから。

うん、なんて自分勝手なんだ俺。昔は若かったな。今も若いけど。さて、どうしようかな」

挑発的な笑みを浮かべる俺。もちろん、俺はそんなに惚れっぽくない。いや、女の子は好きだけどね。惚れるか惚れないかは別なんだよ。

うん、実に最低だ、俺。

そこで、授業開始のチャイムが響いた。

「さて、授業だ。席に戻ろうぜ。いつまでもここにいたら邪魔だ」

「そうですね。でも、私は簡単にはあきらめませんわよ」

「もちろん。そうじゃないと張り合いがない」

お嬢様は席に戻っていった。

あの口調。どうやらお嬢様はよほど自分に自信があるんだろう。

どんなことをしてくるか、実に楽しみだ。

「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

記念すべき初授業。といっても、まだ初日だ。入学前にもらっていた参考書の内容を理解していればそう難しいこともない。理解していれば、だ。

「ほとんど全部わかりません」

やけに自信満々に、醜態を晒すバカが一人いた。もちろん、一夏だ。

「ぜ、全部、ですか……？」

さすがの山田先生も、顔が引きつっている。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

そんなやつは、もちろんいない。

「えっと、師河くん？」

「なんですか？」

「師河くんは、大丈夫ですか？」

「もちろんです。入学前にもらった参考書は理解できていますから。この程度は問題ありません」

「なっ、美鶴！？」

驚いたように、こちらを振り向く一夏。

「なんだ、一夏？」

「お前、勉強なんてしてたのか？ 毎日俺と一緒にだったろう？」

その言葉に、教室がざわめく。おい、誤解を生むような言葉をいうな。俺に男の趣味はない。

「当たり前だ。ここは選ばれた人間しか入れないエリート校だぞ。ある程度の事前学習しておくのは当然だ」

半分うそ。俺はISの知識なら勉強しなくてもある程度は把握している。少なくとも、この学校で三年間で学ぶ知識程度は。

「なんで教えてくれなかったんだよ！？」

「教えるまでもなく、当然だと思ったからだ」

「本音は？」

「おもしろそうだったから」

「ふざけるな！」

「こっちのセリフだ」

これで何回目か。千冬が出席簿を振るった。

「まったく、恥を晒すな。大体、必読と書いてあっただろう」

「でも、千冬姉」

「織斑先生だ」

同じく、一撃。ああ、痛そうだな。

「それで、肝心の参考書はどうしたんだ？」

「……破いた」

「なに？」

「握力がどれだけあるか試そうと思ったんだけどさ。古い電話帳使おうと思ったら、間違えて……」

「馬鹿者」

そして、もう一度バアンツ。

「あとで再発行してやるから一週間以内で覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと……」

「やれといっている」

「……はい。やります」

「がんばれよ」

「お前も、場を乱す発言をするんじゃない！」

しょうがないじゃん。

だって、好きな子ほどこらかいたくなるんだよ。なあ、千冬。

次の休み時間は、箒と一夏、俺の三人で会話した。一夏は怒っていたが、まあどうでもいいか。俺だって少しは反省してるんだぞ。だから休み時間をこうやって幼馴染三人で話すことで、回りの目が気にならないようにしてやってるんじゃないか。

本音は、一夏と話す箒の反応を見るのが面白かったから。

それで、授業開始。今度は、千冬が教壇に立つようだ。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス代表者か。聞くからにめんどくさそうな名称だ。まあ、内容を聞けばまったくその通り。クラス長とかそんな感じの役職らし

い。

「はい、織斑くんが いい と思います！」

「私もそれがいいと思います！」

次々とあがるのは一夏の名前。どうせ千冬の弟だからって理由だろう。俺としては、俺じゃなければかまわない。そんなめんどくさい役職になれば、自分の時間がなくなるからな。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わないぞ」

「お、俺！？」

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いらないなら無投票当選だぞ」

さて、無事に一夏に決まりそうだ。

「師河美鶴さんを推薦します」

俺の思いとは裏腹に、余計なことをいうやつがいた。だれだよ？

「お前は、オルコットか」

「はい、そうです」

席から立ち上がったお嬢様だった。さっきの休み時間はなにもしてこなかったから忘れてたが、なにかを企んでるな？

「そうね、確かに師河くんもいいわね」

「さつき千冬さまと互角だったんだもの。きっとISの操縦も一流よ」

やばい、めんどくさくなりそうだぞ。

「まった。俺はパスだぞ。いいか、よく考える。俺がクラス代表になつたら、女の子と遊ぶ時間がなくなるだろ」

「それがどうした？ それに、推薦された以上拒否権はない」

くそ、聞く耳もたない。まあ、俺の理由を聞けば当然か。さて、どうする。

「織斑先生。よろしいですか？」

「まだなにかあるのか、オルコット」

「はい。わたくし、セシリア・オルコットは自分をクラス代表とし

て推薦します」

「ほう、どういづつもりだ？ 他薦をしながら自薦とは」

「わたくしはクラス代表には実力トップがなるべきだと考えています。そして、現在このクラスでのトップはイギリス代表候補生であるわたくしだと自負しています」

これは純然たる事実だ。他の生徒など、お嬢様に手も足も出ないだろう。

「しかし、それと同時にわたくしはより強い人物を知っています。それが、美鶴さんです」

千冬が俺を見た。なにかいいたいって顔だな。

「……それで、なにがいいたい？」

「つまり……」

「どっちが強いのか、決めようぜってことだろう？」

俺は立ち上がると、お嬢様を見返した。くそ、おもしろいな。

「なるほど、確かに簡単でわかりやすく確実だ。お嬢様が俺に勝てるってんなら、それこそ惚れちまうだろうな」

「ええ、そうです。こうなれば、あなたも断れませんかでしょう？」

「ずいぶん大胆だな。こんなことしなくても、お嬢様のお誘いなら俺は断ったりしないのに」

「それは、わたくしの覚悟の表れだろ思ってください」

お嬢様は笑い、俺も笑った。互いに誘うように、挑発するように。「それで、一夏はどうするんだ？ 別に逃げてもいいけど、俺とマジで戦える機会なんてそうそうないぜ」

事の成り行きを静観していた一夏に、声をかける。

「あら、織斑さんもですか？」

「あいつは俺の弟子みたいなもんだ。甘く見ると、痛い目見るぜ」
「なるほど、それはおもしろそうですね」

で、肝心の一夏はどうするんだ。

「俺もやる。俺がどれくらい強くなったか、美鶴に見せてやる」
「ってことでどうだ。千冬」

「織斑先生だ。馬鹿者」

注意はするが、今度は出席簿はなしだ。さすがに俺たちの空気を
読んだのかもしれない。

「わかった。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリー
ナで行う。初戦は織斑とオルコット。その勝者が師河と勝負だ。異
論はないな」

「ない」

「ありませんわ」

「俺、一試合だけかよ。まあ、いいぜ」
さてさて、楽しくなりそうだ。

挑むものと立ち向かうもの（後書き）

更新の頻度は遅いと思いますが少しずつがんばりたいと思います

変わらない者たち（前書き）

サブタイトルを考えるのが大変です

変わらない者たち

「ああ、織斑くん、師河くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

放課後の教室。俺と一夏が互いに本日のことを振り返っていると山田先生がやってきた。

本日の出来事？ 女の子と一緒に昼食食べた、以上。一夏はぐつたりとしているが、俺は楽しい一日だったと思うよ。

「山田先生、なにか御用ですか？」

「えつとですね、寮の部屋が決まったからお知らせにきました」

部屋番号が書かれた紙とキーを差し出す山田先生。

はて、寮とな？ 確かにこの学園は全寮制だが、しばらくは自宅通学ではなかっただろうか。

「あの、俺たちが一週間自宅から通学じゃないんですか？」

同じことを一夏も思ったらしい。

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理やり変更したらしいです。……二人とも、そのあたりのことって政府から聞いてます？」

ああ、なるほどね。自宅にいたらマスコミやら学者やらがうるさいってことか。一夏も春休み中はそれで苦労して、俺の家に避難してきたっけ。ちなみに、我が家は俺のお母様がすべて撃退したし、その後は押しかけることもなくなった。

きっと、昔のコネでも使ったのだろう。

「そういう訳で、政府特命もあって、とにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。あいにく、個室が一つと相部屋が一つしか用意できなかったもので、どちらかは相部屋になってもらいますが」

「一夏、相部屋な」

「なんでだよ！？」

「俺が相部屋になったら、女の子を部屋に呼べないだろう」

なに当たり前のことを。

「ふ、不純異性交遊はダメですよっ」

「大丈夫、俺は本気で女の子と遊ぶだけですから」

それに、もう経験はしてるし。

「なにが大丈夫なんだ、馬鹿者」

鋭い殺気。俺は身を屈めると、今まで首があつた場所を鋭いなにかが通り過ぎた。

「おい、首と体が永遠にバイバイするところだったぞ」

「そうか。惜しかったな」

当たり前だが、千冬だった。

「どっちみち一ヶ月もすれば部屋が用意できる。どっちでもいいが早く決めろ」

「じゃあ俺が個室でいいな」

「俺も個室がいいんだよ！」

「なんだ、一夏も実は女の子を部屋に呼びたいんだな。このむっつりスケベ」

「俺は部屋でくらいゆつくりしたいだけだ！」

まあ、一夏は学校では落ち着く暇がなかなかなさそうだからな。しょうがない。

「じゃんけんだな。ルールは特になし。一本勝負で恨みつこなしだ」「いいぜ」

そして、互いにこぶしを構えると、

「「じゃんけんっ」「」」

と一夏はパーを出した。それはそれを確認し悠然と、

「チョキつと。はい、俺の勝ち」

「後出しだろ！」

「ルールは特になしといっただろ。後出しが禁止されているわけではない」

「し、師河くん。卑怯ですよ」

なにをいつてるんですか、山田先生。勝負の世界に卑怯もクソも

ない。負けたやつが悪いんだよ。

「はははっ、悪いな一夏。せいぜい、同室の女の子と仲良くするがいい」

「くっ、どうせなにいつても無駄だから諦めるよ。……わかりましたけど、今日は荷物の準備に帰っていいですか？」

「心配するな、私を手配しておいた。着替えと、携帯電話の充電器があれば十分だろう」

うむ、見事に生活必需品しかないな。マンガやエロ本の一冊もないとは、かわいそうなやつめ。

「まあ、心配するなよ。俺が家からゲームでもマンガでもエロ本でも持ってきて貸してやるから」

「お前の分もあるぞ。玲子さんが準備してくれた」
なん……だと……。

「ちなみに、ゲームもマンガもない、お前が隠していたエロ本は私が直々に処分してやった。ありがたく思え」

「……千冬よ、俺がエロ本読むの気に入らないのはわかるが、健康な男子高校生だぞ。持っていたくらいでその処罰。さすがに泣くよ？」

「勝手に泣け。あと、織斑先生だ」

くそ、かわいくないやつめ。そんなのだから女の子からしか告白されないんだ。

「もういいな、いいなら早く寮へ帰れ。夕食は六時から七時だから遅れるなよ。あと、しばらく風呂は部屋のシャワーでがまんしろよ。いいな、師河」

なぜに俺に念を押す。まあ、わかるけどさ。

「なんでダメなんだ？」

「なんだ、一夏は女子と風呂に入りたいのか。やっぱ、男ならそうだな」

「っ！？　ち、ちがうぞ。入りたくなんてないぞ」

「ええ、女の子に興味がないんですか！？　そ、それはそれで問題

のような……」

そうか、一夏はやはり男好きだったのか。これからの付き合い方を考えないといけないな。

「距離を取るなつ。俺は普通に女の子が好きだよ!」

「バカなこといつてないで早く行け」

「バアンツ! と出席簿。うむ、そろそろ潮時だろう。」

「わかったよ、一夏行こうぜ」

「ああ、なんかもう疲れたよ」

俺は山田先生から紙とキーを受け取り教室を出た。その時、一言。

「あとでな、千冬」

千冬にだけ聞こえるように、そうささやいた。

着いた部屋は、個室というだけあってあまり広くはなかった。それでも、家の部屋よりはよほど広いし、生活するには十分だろう。

「さてと、荷物は」

ベッドの脇に置かれていた、キャリーバックを開く。

中には、着替えと洗面道具。当面の生活資金の入った財布、その他雑貨があった。確かに、生きるためなら十分だが、少しは俺の潤いも考えて欲しいものだ。

「それでつと」

着替えなどを取り出し、空になったバック。その中を少し探ると、隠しポケットが開いた。そこは、着替えなどが入っていたスペースよりも大きく、そちらがメインとさえ思える。

そして肝心の中身だ。

「これだけか」

入っていたのは鋼鉄のワイヤー、大小さまざまな大きさ形のナイフ、拳銃と予備の弾倉と分解されたアサルトライフルだ。あとは暗色のコートにおまけのなんやかんや。

さて、なんでこんな物騒なものがあるかというと、お家柄だと思

つてくれればいい。詳しい説明は面倒だからパスだ。

まずは部屋の物色から。適当に部屋を漁ると案の定。

「大漁、いや大量か？」

出てきたのは、厳重に隠された盗聴器と隠しカメラ。どうせ、男子でIS操縦者である俺を監視するために設置されたものだろう。まったく、俺のプライバシーを何だと思ってやがる。

「俺に話があるなら直接来い。かわいがってやるぞ、楯無」

この程度で俺を欺けるとは、甘く見られたものだ。あのバカのとだから、これもお見通しなのかもしれんが、まあいい。

次は、ウサギのイラストが描かれた自己主張が激しいものを手に取る。

「とりあえず死ね、バカウサギ」

あいつはこれでいいや。

それだけいうち、カメラと盗聴器をまとめて破壊する。あとで燃えないゴミの日を確認しなければ。

次は分解されたアサルトライフルの組み立てを始める。それを手際よくこなすと、次は拳銃だ。これも一度分解、その後に清掃をして組み立てた。

「うん、こんなもんだろ」

この作業を始めてもう十年近い。いい加減になれたものだ。がちゃ。とドアノブが回る音がした。

「俺だ、一夏だ！」

「なんだ、おどろかすなよ」

反射的に扉へと拳銃を向けると、そこにいたのは顔を引きつらせた一夏だった。

「おどろいたのは俺だ！」

「ノックをしないのが悪い。それに、俺は武装の整備中だったんだ。そんなところにくるほうが悪い」

実は、俺も無用心だったりする。自分の家の感覚で、カギをしないで整備を始めてしまった。あまり見られていいものではないから

な。

物騒な人物だと思われたら、女の子が部屋に来なくなってしまっ

「それ、どうしたんだよ？ 学校にも持ってきたのか？」

「まあな。許可は取っているから心配するな」

「そうか」

部屋にあつた勉強机、その椅子に座ると一息つく一夏。

「それで、どうしたんだよ」

「…… 箒と部屋が一緒だったんだ。それで、ちよつとな」

「どうせお前のことだから風呂上りにでも出くわしたんだろ」

「なんでわかるんだよ！？」

当たり前だろ、このラッキースケベめ。

「それで、どうだったんだ？」

「なにが？」

「どれくらい成長してた？ 胸の大きさとか」

「ばっ！？」

一夏が顔を赤くする。どうせ、見た光景を思い返しているのだろ
う。

「なにいつてんだよ！」

「なにつて？ 男としては気になるだろう。昔は一緒に風呂なんか
も入ったんだ。それがどれだけ成長したか知りたくはないのか？」

「何時の話をしてるんだ！」

確か、小学二年生くらいかな。あの時は男も女もなかったからな。
「服の上から見た感じでは、かなり大きかっただろ。どうだった？」

「あ、え、うつ……」

言葉に詰まる一夏。くそ、一人だけの秘密にして夜のネタにでも
するつもりか。幼馴染に対して、実にけしからん。俺にもその幸せ
を分けて欲しい。

「ここか、一夏！」

そこで本人登場。蹴破るような勢いで、木刀を持った箒が入っ
てきた。

「おい、人の部屋に入る時はノックをしろ。集団生活なんだからマナーくらい守れよ」

「一夏、見つけたぞ！」

俺の言葉も許可も聞かず、勝手に部屋に入る幼馴染。

なんだろうな。六年振りに再会したかわいい女の幼馴染が部屋をたずねてきたというのに、まったく嬉しくない。

「ま、待て箒。俺が悪かった、謝る。だから許してくれ」

「問答無用」

「じゃねえだろ、バカ」

箒が振り下ろす木刀。それを片手で受け止めると、もう片方の手で箒の頭に手刀を入れる。

「落ち着け。照れ隠しだか怒ってるのか知らんが、仮にも剣士ならくだらない理由で剣振るうんじゃねえよ」

「し、しかし……」

「いい訳はいらない。少し反省しろ」

「……すまん、美鶴。感情的になりすぎたようだ」

しゅん、とうなだれる箒。まったく、落ち込むなら最初からやるなよ。

「で、理由はなんだ？ 風呂上がりの半裸姿を見たところまでは聞いたぞ。俺にも見せる。そしてそのけしからん胸を揉ませてくれ」

「だれが揉ませるか！ そのことはいい。あれは事故だ。だがな……」

……

ふむふむ、一夏が竹刀に引っかけた箒のブラを見た。その理由も偶然っぽいけどな。箒にも落ち度はあったっぽいし。それで思わず木刀を振ったら一夏に避けられた。それでまた振ったら一夏がまた避けたから意地になっってこうなったと。

まあ、そりゃ避けるだろ。当たったら痛いし。攻撃には反射的に避けるように仕込んだし。怒りで単純になった箒の太刀じゃかすりもしないだろう。

結論、

「くだらないことで喧嘩するな。とりあえず、お互い謝つとけ」

「そうだな。ごめん、箒」

「私も、すまなかった。一夏」

こついう時、いつも仲裁するのは俺の役目だった。それが、今になつても同じ役とはな。いい加減、昔のまんまで嬉しくなるぜ。

「なに笑つてるんだ？」

「いや、何時までたつてもガキだなんて思ったんだよ」

「失礼なヤツだな。お前こそ、そうやって大人ぶるのは昔からだ。

それに、昼間のオルコットとのアレもそうだ。強い女を求めるのも、昔から少しも変わってない」

それはしょうがない。俺個人の好みの問題なのだ。強い女性と戦い、身を削り、互いを求め、その果てに愛し合う。いや、ずいぶん歪んだ恋愛感だな。

「まっ、それを含めて互いに積もる話もあるだろう。飯でも食べながら、昔話でもしようぜ」

「いいな、久しぶりの再会なんだ」

「ああ、そうだな」

それから俺たちは食堂で夕食を食べながら、思い出話や今までのこと、そしてこれからのことを思う存分話した。とても、充実した時間だったと思う。

そんなこんなで日も変わる頃。話は夕食後も続き、すっかり夜も深けてしまった。いい加減寝なくては明日に響く。のだが、

「いらつしゃい、待ってたぜ」

深夜の来訪者。普段なら迷惑だと追い出すのだが、こいつは別だ。

「狭い部屋だけど、座れよ。千冬」

俺は織斑先生とは呼ばず、名前で呼んだ。それに、今回は怒ることもなく、

「それは、この部屋を用意した学園の教師である私への嫌味が、美鶴」

それは、プライベートの織原千冬だった。さすがに黒のスーツ姿ではなく白のジャージを来ているが、それがまた嫌にかっこいい。美人は何を着ても似合うね。

「冗談だ。で、話はなんだ？」

「話があるのはそっちだろ。この数ヶ月はドタバタで会えなかったんだ。なにか、いいたい事があるんじゃないか？」

「そのドタバタの原因の一人がなにいつてるんだ」

と呆れたように笑う。俺も同じく、笑った。

「酒はないが、コーラならあるぞ」

「もらおうか」

俺はグラスを二つ出すとコーラを注ぎ、一つを千冬に差し出す。

二人で並び、ベッドに腰掛ける。

「そうだな、なにかから話そうか。まずは、礼をいわせてくれ。一夏を預かってくれて、ありがとう」

それは、俺たちがISに乗れることがわかってからの数ヶ月、一夏が俺の家に住んでいたことをいつているのだろう。

「別に、いいさ。今までもよく泊まってたんだ。改めて礼をいわれるほどの事でもないだろ」

「それでも、さ。もし一夏が一人で家にいたら、なにがあるかわからなかった。それを守ってくれたのは美鶴と玲子さんだ。本当にありがとう」

確かに、一人で家にいたら記者や国の役員や研究者などのせいで落ち着く暇もないだろう。

「しかし、本当にブラコンだよな。一夏の心配ばっかで、俺はどうでもよかったのか」

「そ、そういうわけじゃない！ もちろん心配はした。だが、美鶴の強さはよくわかってるからで、一夏はまだ弱いからだな……」

俺の意地悪な言葉に、慌てて弁解する千冬。その姿は、昼間のき

りつとした雰囲気など少しもない。

その姿がかわいいので、俺は千冬の口を、自分の口で塞いだ。

「……」

「……」

互いに、しばしの沈黙。そして、口を離すと拗ねたように、

「不意打ちとは卑怯だぞ」

「千冬がかわいいからいけないんだろ。まっ、気にするな。千冬の弱さはわかってるからさ」

世間では最強などと呼ばれている千冬も、常に強いわけじゃない。弱さも、もちろんある。その一つが、一夏だ。一夏のこととなると過保護になるのは、それだけ大事に思ってるからだ。俺のことを想ってくれてるのもわかるが、やはり妬けてしまうのはしょうがない。少しの意地悪くらい許してもらおう。

「コホン」

顔を赤くした千冬が一息、気を取り直して話を再開する。

「それで、だ。美鶴、なぜ自分と一夏だけが男でありながらISに乗れるか、検討はつくか？」

「まあな。確証はないが、多分バカウサギのせいだろう」

「やはり、束か」

篠ノ乃東。ISの製作者で天才中の大天災。世界を自分と、大切な人物数人と、それ以外でしか考えられない異常者でもある。あと、俺の天敵。

その大切な数人の中になんということだろう、俺と一夏も含まれているらしい。それが、理由だろう。大体、ISのコアを書き換えられるなんて束しかないだろう。

「なに考えてるんだ、束は」

「ただの暇つぶしの可能性もあるな。なんせ、部屋にカメラと盗聴器まで仕込んであったんだから」

「なに？」

「安心しろ。全部壊してある」

千冬のかわいい姿を束になんて見せてやるか。俺が独り占めするのだ。

ちなみに、一夏にはさつき妨害電波を出す装置を渡しておいた。筈はなんだかわかってないみたいだが、一夏はとりあえずわかっただろう。まあ、盗聴と監視される理由はわかってないだろうけど。体だけじゃなくて、頭も鍛えるべきだったかもしれない。

「そうか。あとは、少し文句がある」

「文句？」

「オルコットのことだ。ずいぶん、仲がよさそうだったが」

ああ、お嬢様のことが。ふふん、妬きもちか。

「気になる？」

「別に、お前の浮気癖はわかってるし、私への気持ちも理解している。オルコットが、美鶴の好みかもしれないということもわかったが、それでも、あまり気分のいいものではないな」

少し悲しそうに笑う千冬。弱い千冬だ。

ああ、ダメだ。そんな顔するなよ、千冬。そんな顔見せられたら、我慢できないじゃないか

「え？」

俺は千冬を抱き寄せると、そのままベッドに押し倒した。

「な、なにするんだっ？」

「なにつて、男と女がすることなんて一つしかないだろう。それに、ここしばらく千冬と会えなかったから溜まってるんだよ。千冬だつてそうだろう」

「しかし、今の私と美鶴は教師と生徒で……」

といい訳をする千冬の口を、また自分の口で塞ぐ。先ほどよりも長く、深く、攻めるように口付けを交わす。

「さて、嫌とはいわせないぞ。いうんだったら、そのたびに口を塞ぐことになる」

「……やっぱり、卑怯だ」

「何とでも。それで、どうする？」

千冬は恥ずかしそうに顔を赤くし、悔しそうに顔を背けると、首を小さく縦に振った。

そうして、高校生活一日目は過ぎていった。

変わらない者たち（後書き）

これってR - 15にしたほうがいいのでしょうか？
誤字脱字あれば報告お願いします

それぞれの戦い（前書き）

なんだか、このままいくと鈴だけあんまり変わらないことになりそうです

さてどうしよう

それぞれの戦い

「寮っていいな。準備しなくても食事が出てくるんだから」
「そうだな」

高校生活二日目。

俺と一夏。簞は朝食を食べに食堂へと来ていた。世界中から生徒が通っているだけあり、メニューも国際色豊かなこの学校。

俺はとりあえず、洋食セットを頼むことにした。

「いいよな、このスクランブルエッグ。ふわふわのとりとろだ」

「こっちの米も食ってみるよ。かまどで炊いたみたいだぜ」

二人して、楽しんで食事にありつける幸せをかみ締める。

「そんなに嬉しいのか？」

「まあな。朝の時間は数分でもすごい貴重だ。仕事が少ないほどありがたい」

一夏はは半分一人暮らしみたいなものだし、家事は必然的に自分で行うことになる。俺は、味覚音痴の母親の影響で食事だけは家族のものを用意している。

「織斑くん、隣いいかな？」

数名の女性とが、盆を持って声をかけてきた。

「もちろん、隣にどうぞ」

一夏ではなく俺が答える。

「やった、ありがとう」

「いえいえ、俺のは女性からのお願いは断らないんで」

「……出たよ、美鶴の八方美人」

呆れたように俺を見る一夏と簞。

失礼なヤツだ。第一、一夏にだけはいわれたくないな。

「あれ、師河ちゃんと織斑くんって知り合いなの」

「まあな。簞もそうだけど、幼馴染なんだ」

女性の楽しく談笑を始める俺と一夏。それに比例して、簞が不機

嫌になっっていく。

わかりやすい。そしてヘタレだな、箒。もつと積極的にいかない
と一夏はわからないぞ。

「へえ、師河くんって昔からこんな感じなんだ」

「そうなんだ、しょっちゅうナンパに付き合わされてさ。こっちは
たまったもんじゃないよ」

「ナンパとは失礼な。ただ町に出かけて、美しい女性がいたら声を
かけてるだけだろ」

と、俺たちは話す。だが、

「でもさ、師河くんって本当はあんまり本気じゃないよね？」

「なにが？」

「女の子へのアプローチ」

……へえ、なかなか鋭いこというな。少し話ただけでそのこと
がわかるとは、おもしろい子だ。

「なにいつてるのよ、今時珍しいくらいの肉食系じゃない」

「そうかな」

「そうだよ、ねえ？」

さて、どう返事をしようか。

「そうだね。それは、自分で確かめてみたらどうかな」

俺は席を立つと、先ほどの言葉を発した女性とに近寄り顔を寄せ
る。

きぐるみのようなパジャマを着た女子だ。

「名前、聞いてもいいかな」

「布仏本音だよ」

ああ、なるほど。布仏の人間か。盗聴器壊した腹いせか何か知ら
ないが、やってくれるな、楯無。

「いつまで食べている！ 食事は迅速に効率よく取れ！ 遅刻した
らグラウンド十週させるぞ！」

食堂に千冬の声が響く。時間切れのようだ。

「残念、今回はここまで。また、次の機会にしよう」

俺は顔を離すと、顔を赤くしている一夏たちを無視して席に戻ると食事を再開する。

グラウンド十週は嫌だからな。

授業は相変わらず退屈だった。なにせ、兵器や武器についての知識を学ぶことは俺のライフワークのようなもので、特に最強の兵器であるISについてなど、俺に教えられるものは千冬と同程度あると自負している。なので、授業中はもっぱら山田先生の胸を見ることに従事している。うん、大きいな。

それに比べて一夏はグロッキー状態。あの分では、新しくもらった参考書もほとんど読んでないのだろう。

そんなこんなで休み時間。地獄のような苦痛から開放される貴重な時間だ。

一夏の席に向かうと、昨日のように机に座る。

「お疲れ」

「……ああ」

返事が小さい。死にかけのようだ。

「美鶴、さっきの授業、山田先生は何語を話してたんだ？」

「主に日本語。専門用語は英語も混じってるな」

「そうか……」

そして、机に突っ伏す一夏。

そんな一夏を気にすることもなく、今日も今日とて女子が俺たちの周りに集まってくる。

マシンガンのように出される質問に、困惑顔の一夏。俺は適当に答えていく。

「ねえ、千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの!？」

「え。案外だらしな……」

「バアン！」

「休み時間は終わりだ。散れ」

一夏の言葉は、千冬によって止められた。

都合の悪いことは口封じか。やれやれ、大人って汚いな。

「何かいい気だな」

「なにもありませんよ、織斑センス」

別に、ベッドの上での千冬の姿をバラそうなんて考えてませんよ。十八禁な上に、人に教えるにはもったいない。

「まあいい。ところで織斑、お前のISの準備だが時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそう
だ」

「???」

意味がわかってない一夏。これくらいわかってくれよ。

しかし、専用機か。国も大きく出たな。世界で二人しかいない男性操縦者を手元に置いておきたいってことが。

千冬に教科書の音読を命じられた一夏は、やっと状況が飲み込めたようだ。

バカウサギの気まぐれのせいで、現在ISコアは467しかない。一つの国が保有する数は、あたりまえだがそれよりもさらに少数だ。その貴重な一つを、一夏のために使おうというのだ。

「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者な
んですか」

話の中にバカウサギのことがあったせいか、聡い生徒が聞いてきた。まあ、珍しい苗字だしいずれはバレると思ってはいたが、早かったな。

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ。」

あっさりバラす千冬。それに、教室が沸き立つ。クラスに有名人の身内が二人もいたのだ。無理もない。しかし、

「あの人は関係ない!!」

箒は大声を上げた。バカウサギの話は、箒にとって地雷みたいなものだからな。

「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

さてさて、空気が悪くなったな。しょうがない、助け舟でも出するか。

「織斑センセ。俺には専用機ないの？」

「ない。IS一つ作るのにどれだけの資金と時間が必要だと思っている。コアも、そういくつも都合できるものじゃない。故に、今回は先着順で織斑のISだけが作られることになった。試合の日には学園の訓練機を準備してやる。安心しろ」

世間的には、一人目が一夏。二人目が俺ということになっているからだな。しかし、本音は別のところにある気がする。もっと政治的な、軍とか他国とかが絡むような……。有名人を身内に持つと大変だということだな。

「お互いがんばろうぜ、一夏」

「突然なんだよ？」

「さて、授業を始めるぞ。山田先生、号令」

俺は訳がわからないという顔の一夏を無視して席に戻る。

しかし、一夏に専用機か。俺の対戦相手はお嬢様だと思っていたが、思ったより楽しめるかもな。

「安心しましたわ」

「何が？」

昼休み。俺はお嬢様に誘われて屋上で昼食を取っていた。

ちなみに二人だけ。一夏は箸と食堂に行った。二人だけにしてやったのだ。少しはがんばれよ、箸。

「織斑さんの専用機のことです。さすがに訓練機に乗った素人では勝負になりませんもの」

一見、相手を見下したような発言だが、すべて事実だ。代表候補

生であるお嬢様は専用機持ちで、ISの操縦時間も数百時間になっているだろう。

それに対して、一夏は入学試験の時わずかにISを操縦しただけだ。まぐれで山田先生に勝ったようだが、そんなもの考慮するには値しない。どんな兵器でも、十全に扱うにはそれ相応の時間が必要なのだ。

「ま、そうだな。俺もそのほうが少しは楽しめる」

「安心してください。私が織斑さんを下し、美鶴さんを心より満足させて見せますわ。それこそ、織斑先生以上に」

あれ、千冬の話がここで出てくるのか？

「わたくしも女です。想い人の心が、どなたを向いているかくらいわかりますわ。もちろん、だからといって諦めたりしませんけど」

「まさかお嬢様からそのような言葉が聞けるとは、光栄です」

かわいく笑うお嬢様に、俺は軽く答える。やれやれ、たくましくなったものだ。

「それで、美鶴さんはどうしますの？ 訓練機を借りるおつもりですか？」

「いや、借りない。訓練機でも専用機でも、いきなり乗った俺がお嬢様に勝てるとは思えない」

ISに圧倒的な能力があるか、お嬢様に油断があるかしないと勝利は難しいだろう。打鉄に乗った俺がお嬢様に挑んでも、勝率はかなり低い。せめてもう少し訓練ができれば、ものにはなるのだろうが。これもまた、覆らない事実だ。

実際、試験の日に対戦した千冬とは五分しか持たなかった。ISに乗った千冬が化け物なのはわかってはいるが、五分しか戦えなかったのは無念だ。

くそ、生身同士なら負けないのにな。

「じゃあ、どうしますの？」

策はある。対抗手段も考えてはある。しかしそれは、詰まるところ、

「ただ、いつもの俺の戦いをするだけさ」
それだけの話だ。

「そうですね。それは、私も全力でいかなければなりませんわ」
そう笑うお嬢様は、楽しそうだった。とても楽しそうな、戦士の顔だった。

「さて、物騒な話は終わりだ。食事にしようぜ」

「そうですね。わたくし、お弁当を作って参りましたの」

そういつて、お嬢様は二人分のランチボックスを取り出した。

「準備がいいね」

「当然です。これも、美鶴さんをわたくしに惚れさせる戦いの一つですから」

自信満々にランチボックスの蓋を開けると、そこには色鮮やかなサンドイッチが詰まっていた。

「うまそうだな。いただきよ」

一つ取って口に入れる。さて、そのお味は。

「……」

「どうでしょう？」

期待に満ちた眼差しのセシリア。

「……これ、味見たか？」

「いえ、してませんけど」

それがなにか、とお嬢様はいった。

なにか、じゃねよ。お嬢様のサンドイッチの味。それはすさまじかった。

甘いようなすっぱいようなしょっぱいような。まるでお袋の作った料理のようだ。見た目がよかっただけに、なお悪い。

「試しに食べてみる」

俺の食べかけも、お嬢様の口に入れる。最初こそ、間接キスだと気づいたのか顔を赤くしていたが、すぐに青ざめてくる。

「感想は」

「……これも、わたくしが乗り越えるべき戦いですわ」

「勝てるのを期待してるよ」

と、もう一つサンドイッチを口に入れる。やはり、すさまじい味だ。

「美鶴さん、無理はしなくていいですわ」

「これ食わないと、俺は午後の授業を空腹で過ごすことになるんだよ。この程度ならお袋の料理でなれてる」

それに、女が俺のために飯を作ってきたんだ。それを残すわけにはいかないだろう。

「……ありがとうございます。大好きですわ、美鶴さん」

お嬢様はそう、優しく微笑んだ。

不覚にも、かわいいと思ったのは黙っておこう。

それぞれの戦い（後書き）

とりあえず一巻完結を目指します

戦う意味（前書き）

鈴は一夏と美鶴のどちらのヒロインにしようか迷い中。どちらでもいいんだけど、バランス的に一夏かな？

戦う意味

「やつほー、お元気？ 美鶴だけど、今大丈夫？」

「……今から寝るところだったんだけど」

電話の向こうから聞こえてきたのは、かわいらしい女の子の声。その声には、そこはかとなくダルさが感じられた。

「あれ？ 時差を考えてもまだ昼間だろ？」

「徹夜で作業してたんだよ。こっちも社運がかかってきて、今は忙しいんだ。会社はどうでもいいけど、潰れるとISの整備なんかが大変なんだよ」

「そうか、それは大変だな。で、お願いがあるんだけど」

「僕の話聞いてた？ 今すごい忙しいんだけど」

「そうか、がんばれ。でだ、ちょっと準備してもらいたいものがあるんだけど」

「僕の話、まったく聞いてないんだね」

「聞いて欲しいのか？ ベッドの上でならいつでも聞くぞ」

「じゃあ、対価はそれでいいよ。僕も近々日本に行くことになるから、その時は優しくしてね」

「ああ、存分にな」

必要な物のリストはメールで送る、と伝え電話を切った。

「というわけで、女の子と寝ることになった。もちろん、エロい意味でな」

「なんでだよ！」

夕飯時の食堂。俺にとっては昼以来の食事だが、どれほど待ち望んだことか、まともな食事を。ああ、白米がうまい。味噌汁のダシがきいている。ビバ、日本食。

「お、お前は！ 何か必要なものがあるからと電話したのではないのか！」

「そうだよ。楽しい食事の前に、やることはやっておきたかったか

らな」

「それがなぜ、セツ……っ！」

「セツ？ ああ、セックスか。おい、食事中だぞ。せっかく俺が表現を和らげてやったというのに。もう少しTPOをわきまえろよ、
箒」

顔を真っ赤にする箒に、俺は呆れた。こういうマナーにはうるさいヤツだと思つたが。一夏と再会したせいでおかしくなってきたのか？

「う、うるさい！」

「それより俺としては恋人がいるのに、そう軽々と他の女生と関係持つのはどうかと思うんだが。弟としては怒るところだぞ、これ」

千冬が彼女か、どうも違和感がある。千冬との関係はそう簡単にいい切れるものではないからな。運命以上宿命以下みたいな。

「あいわからずシスコンだな。心配するな、俺の千冬への愛は揺らぐことはない」

「まあ、そうだろうな」

一夏は苦笑しながら、お茶をすする。なんだかんだで、一夏は俺と千冬のことを理解してくれてるからな。自分でも歪んでは思うからこそ、こういう理解者はありがたい。

「こ、コホン。それでだな、いったいどこに電話してたのだ？」

気を取り直し、改めて箒がたずねてくる。まだ顔が赤いぞ。

「我が家御用達の武器会社。まあ、正確にはその支社みたいなものだけど。で、そこに彼女がいるからさ。月曜のために武器を都合してもらおうと思つて」

「武器つて、IS用の」

「まあな」

へえ、と一夏と箒は返事をした。まあ多分、本当の意味をわかつてないな。

「しかし、お前はどれだけ女と関係を持ってるんだ。男として、一人の女性を一途に思うべきではないか」

「世界の歴史を遡れば、側室がいた偉人なんていくらでもいるだろう。それに、俺だって誰でもいいわけじゃない。ある程度の線引きはしてるさ」

これは本当。今まで俺が望んで関係を持ったのは二人。ビジネス上の都合で一人。半ば襲われる形で一人だけだ。

「それより、そっちはどうなんだ。勝算はあるのか？」

「ああ、箒にISについて色々教えてもらおうと思ったんだけどさ」「一週間程度の付け焼刃では無理だ。なので、剣一本に絞る」

つまり、だ。物覚えの悪い一夏ではISの知識を少し覚えただけでは何の役にも立たない。なので剣を交え一夏もモチベーションを高め、できあがったところをお嬢様にぶつけるというわけだ。

しかし、さすが姉弟。昔、千冬がしていた調整方法と同じだ。ISの大きな試合の前は俺が相手になったものだ。昼は剣と銃弾を交わし、夜はベッドで互いをむさぼり合う。そして死んだように眠り、また戦う。いやはや、充実した日々だったな。

「まあ、悪くないな」

一夏は頭ではなく体で覚えるタイプだ。せめて、お嬢様の機体データや戦闘データがあれば何とかなるのだろうが、新学期始まって早々では満足にあるとも思えない。しかも、お嬢様だって日々成長しているだろう。なら、そんなデータなどに頼ってない知恵絞るよりは、自分を高めることに集中したほうがいい。

「で、どうだった？ 手合わせした感想は」

箒は全国大会で優勝する程度の実力だったな。それだと、一夏の方が幾分か上だと思うが。

「最初は俺が優勢だったんだけどさ」

「最後のほうは私も何本かとったぞ。相手をしている私が不甲斐ないと、一夏の訓練にならないからな」

俺の予想が外れたな。昨日の一件、箒は一夏が絡むと周りが見えなくなるところからなにか問題を起こすと思ったが、そうでもなかったか。

「なんなら、明日から見学に来るか？」

「いや、お楽しみは取っておくよ」

それに、俺もやることがあるからな。

考えるのは、六年ぶりに再会した幼馴染二人のこと。

一人は、織斑一夏。私が、その、こ、恋をしている少年だ。出会いは小学一年生の時。それからずっと、恋をしてきた。その想いは離れていても色褪せることはなく、再会してからさらには強くなっただけだ。

強く、かつこい。そんな、大好きな少年だ。

もう一人は、師河美鶴。美鶴との出会いは、一夏よりかなり後。その出会いは最悪で、最初は彼に対して嫌悪と恐怖しか持っていなかった。しかしそれも、最初だけ。同学年ではあるが、それは中学で一年留年したためらしく、本来は私と一夏よりも一つ年上の彼。美鶴は、難がある性格をしているが、厳しくも優しくもあり、それでも私たちにとっては兄のような存在になった。

それは、六年がたった今でも変わっていない。

高校生活初日に、私が感情に任せて振るった木刀を受け止めた彼がいった言葉。それは、私に対して確かな変化をもたらした。

それを感じたのが、今日の一夏との訓練だ。

恥ずかしながら、その時、私は浮かれていた。一夏と同じ時間を過ごせることに、一夏が私を頼ってくれていることに浮かれていた。そんな私を、一夏はあっさりと負かした。仮にも、剣道で全国大会で優勝をした私が、あっさりと負けたのだ。

一夏は美鶴に手解きを受けていたと聞いていたが、それでも、私は簡単に負けすぎた。

最初は、その事実が受け入れられなかった、だが、数度も剣を合

わせる内にすぐわかった。

一夏は、私のことしか見ていない。ただまっすぐに、相手である私だけを見て、精神を研ぎ澄まし、剣を振るってきた。

まるで、愛しい相手だけを求めるように、剣を振るってきたのだ。それはかつて見た、ただ互いを求めて戦う美鶴や千冬さんたちのようだった。まさしく、戦う者の姿だった。

その一夏の姿勢が嬉しく、また恥ずかしくもあった。一夏は純粋に私を求めてくれているのに、私はなんて汚れているのだろう。

怒りに任せ剣を振り、その場をごまかす為に剣を振り、浮かれた気持ちで剣を振るう。昨日、剣が一夏にかすりもしなかったのも、今日もまた勝てないのも当然だ。

私が同じ場所で立ち止まっている六年間で、想い人はずいぶんと先に行ってしまったようだ。

とても情けなかった。ひたすらに情けなかった。私を頼ってくれた一夏に、こんな醜態を晒すのが情けなかった。成長していない私が情けなかった。なによりも、弱い私が情けなかった。

汚れていて、情けなくて、醜悪で、弱い。だからこそ、私はこうも思った。

強くなりたい。

一夏のように、セシリアのように、千冬さんのように、美鶴のように、強くなりたい。

そう想った瞬間、今まであった心の靄がなくなった気がした。別に、一夏に対する思いや、複雑な嫉妬がなくなったわけではない。

それでも、剣を持ち一夏に対峙している間だけは、そんな不純な気持ちなどは一切ない。ただ目の前の一夏だけを、剣を振るう相手だけを見ていた。

その後は、やはり私が終始不利ではあったものの、何本が一夏から取れるようになった。

互いに剣を振り、技を競い、ひたすらに戦った時間は、この数年間味わったことがないほど充実していた。

だから、私は思う。今から、始めよう。篠ノ之箒の戦いを。一夏への想いも、剣の腕も、ISの操縦も、姉さんとの関係も、すべて戦い乗り越えよう。

私の自慢の、二人の幼馴染に負けない。いや、勝てるように戦おう。

「頼もう」

授業も終わりそうそう、一夏と箒は訓練のため剣道場へと向かった。箒がやけにやる気だったのが印象的だ。それも空回っている感じではなく、とても充実しているような気だ。昨日もそうだったが、心境の変化でもあったのだろうか？

お嬢様もそうそう教室を後にした。昼休みに強烈な味のおにぎりを食べながら聞いた話では、アリーナを借りて鍛錬をしているらしい。

そして俺だが、対戦相手の二人が鍛錬をしているというのに、一人のんびり胡坐をかいているほど俺は慢心などしない。むしろ、今回の戦いは専用機を持たない俺が一番不利とさえ思っているほどだ。なので俺も鍛錬をしようと思うのだが、相手がいない。一人でしよとも考えたが、ここ最近は戦闘をしていないので、どうせなら一夏たちのように対人でやり勘を戻したい。だが、俺と互角で戦えるものなど早々いるものではない。一番の理想は千冬なのだが、さすがに教師の仕事があるとのことと断られた。そうになると、次善の手はこの学園最強の生徒となるわけだ。

「やあ、美鶴くん。生徒会になにか御用かな？ 悩める生徒の相談なら、どんなことでも聞くよ」

そう扇子を広げいやらしい笑みを浮かべるのは、更識楯無。この学園の生徒会長で、IS学園最強の肩書きを持つ女。ついでに、俺

とは旧知の仲。

「そうかい。じゃあ文句でも一つ。部屋にプライベートを無視して盗聴器や監視カメラを仕掛けるバカがいるんだがどう思う？」

「そんな迷惑なヤツがいるのかい。それは忌々しき事態だ。そう思うだろ、虚？」

「そうですね、お嬢様」

楯無の言葉に、苦笑しながら答える眼鏡で三つ編みの女生徒。

「はっ、どこで会ってもかわらないな。同じクラスの本音、あれは虚の妹だな」

「そうだよ。私からの入学祝と挨拶は気に入ってくれたかな？」

「ああ、嬉しくて涙が出そうだ。だから、今日はそのお返しに来たぜ」

俺と楯無は、共に笑顔を浮かべる。少なくとも俺は、友好的に笑っているつもりはない。

「それはありがとう。ところで、小耳に挟んだんだが、来週の月曜にクラス代表を決める決闘を行うそうだね」

「さすが、学園内でのことは何でも知ってるな。更識の名は伊達じゃないってか」

「師河の御子息に褒められるとは、私も鼻が高いよ。それで、今日の用事はそれが関係してると思うんだが、違うかい？」

「俺はただの不良息子だよ。それより、いっちょバトロうぜ」

まったく。俺は両親ほど立派な人間じゃないよ。それどころか、いつも心配ばかりさせている不出来な子供さ。それよりも、本題と行こうじゃないか。

「やっぱりそれか。どうせ、そんなところだろうと思ったよ。私を調整相手に選ぶなんて、まったく、君くらいのものさ」

「断るってのか？ 校内ではいつでも襲って来いとかふれ回ってるのに、俺はダメなのかよ。それとも、女尊男卑の今は男なんかに構ってやれないとかいうのか」

「まさか、私は生徒会長だ。学園の生徒を差別なんかしないさ。そ

れに、美鶴くんに襲われるなら、それもまた悪くない」

「そうか、よっ」

俺は袖に隠していたナイフを取り出すと、楯無に投擲した。それが、開戦の合図だった。

「まったく、美鶴くんはせっかちな」

それをいつの間にか手に持っていた鉄扇でな難なく弾くと、俺の意識の隙間を縫うように接近する。

「だけど、嫌いじゃない」

振るわれる鉄扇。それを今度は腰から引き抜いたりボルバー型拳銃で払うと、もう片方の手で拳を繰り出す。それを半身で避けた楯無は俺から距離を取った。

「まったく、物騒なものを出したね。それは人に向けて撃つものじゃないな。当たれば人間は即死だよ？」

「訓練弾だから心配ない、当たっても骨が砕ける程度だ。それに、遠慮なく頸動脈狙ってくるヤツにいわれたくないな」

「それは美鶴くんを信じての行動だよ。あれくらいじゃ、君を倒せない。女性にこれほど信を置かれているんだ、喜びたまえ」

「ああ、まったくだ。その調子で、思う存分かわいがってやろうか」「それは楽しみだね。……虚、下がってなさい」

「はい、お嬢様」

それを皮切りに、俺は引き金を引き、楯無は鉄扇を振るった。その日の戦いは、日が暮れるまで続けられた。

最後に、この戦いはお互いが本気ではなかったため決着がつかず、決闘の日まで毎日行われた。そのたびに生徒会室を始め学校中の備品を破壊することになるので、同じく毎日のように反省文を書かされたのは秘密だ。

そして月曜日。待ちに待った決闘の日がやってきた

戦う意味（後書き）

次の一話で一夏対セシリア

その次に勝者対美鶴ですね

第と楯無はこんなキャラでよかったか？

感想、ご意見お待ちしています

銃対剣（前書き）

連続投稿行きます

一巻の前半部分が終わる予定です

銃対剣

「やる気は十分つてところか」

「ああ」

月曜の授業が終わり、これから放課後という時間帯。俺は一夏と
箒に声をかける。

「調子は、どんな感じだ？」

「やれることはした。あとは全力でぶつかるだけだ」

「今の一夏なら、代表候補生だって、美鶴にだって勝てるさ」

「いや、それは大きく出すぎだよ」

と、箒にツツコミを入れる一夏。

「そんな弱気でどうする！ 初めから負けるつもりで戦おうという
のか、一夏は！」

「ああ、そうだな、そうだった。まずはセシリア。次は、美鶴だ。
今日こそ、俺が勝たせてもらう！」

「ああ、楽しみだ」

一夏と箒。なかなかいいコンビだな。この一週間の間でずいぶん
距離が縮まったようだ。なんだ？ キスくらいはしたのか？

くそ、失敗した。一夏たちの部屋の盗聴器やカメラ破壊するとき、
俺用の盗聴器でも仕掛けておくんだった。

それはさておき、

「で、一夏のISはどんな機体なんだ？」

俺が疑問を口にした瞬間、二人の空気が凍った。

「どうした？」

「それが、その……」

「まだ、来てないんだ？」

なにがだよ。

「ISが、来てないんだ」

「はあ！？」

俺は珍しく、マヌケな声を上げてしまった。

決闘前のこの時間帯で、まだISがない？ 俺は昨日の内にでも届いて最低限、フォーマットやフィッティング。簡単な動作や武装の確認くらいはしたものと思っていたが。

「……がんばれ」

「がんばれ、じゃねえよ。どうすればいいんだよ、美鶴！」

どうすればいいと聞かれてもな。

「おっと、もう時間だな。俺も準備があるから、先に控え室に行くわ。健闘を祈る」

「う、裏切り者！」

「は、薄情者！」

幼馴染二人が何かいつている気がするが、気のせいだと思おう。

「来ましたか」

「ああ、遅れて悪かったな」

俺の控え室のモニターには青いIS、ブルーティーズに搭乗したお嬢様と白いISに搭乗した一夏が映っている。

どうやら、一夏のISは時間内に間に合ったらしい。名前は、白式か。見た目まんまの名前だな。

「それがあなたのISですか。なるほど、いい機体ですわね」

「セシリアのISだって、まるで騎士のように気高さを感じるぞ」

「お褒めにあずかり光栄です。さて、こうして対峙しているというのは何時までも話しているだけ、なってのは味気ないですわね」

「そうだな」

一夏は右手に、刀状の近接ブレードを展開する。なるほど、一夏の専用機というだけあって、ぴったりの武装だ。射撃訓練をしていないこともあり、今の一夏には最適な武器だろう。

「それでは、始めましょう」

「それじゃあ、始めよう」

最初に動いたのはお嬢様だった。六十七口径特殊レーザーライフル、スターライトmk?より、鋭い閃光が放たれる。

一夏はそれを回避しようとするが、間に合わず肩の装甲の一部が持つていかれた。今頃、一夏はブラックアウトこそしないにすれ、味わったことのない気持ち悪さの重力を体感していることだろう。

それにしても、今の銃撃。俺にいわせればまだ荒いところがあるが、それでも速く正確な銃撃だった。射撃の正確さなら、間違いなく一学年トップクラスだ。

それに反応した一夏もさすがといえさすがだが、如何せん機体がまずい。まだ初期設定のあの機体では、一夏との反応がかみ合っていない。あれでは、避けられるものも避けられないだろう。ただでさえ、遠距離武器への対応は最低限しか教えてないからな。

「今のを避けますか。さすが、美鶴さんに手解きを受けたというだけはありますね。銃撃への反応速度は、賞賛に値します。しかし、それだけにどこか動きがぎこちないようですが……?」

「悪いな。こっちはまだISに乗って日が浅いんだよ」

「本当に、それだけでしょうか?」

果敢にお嬢様に斬りかかる一夏だが、そのすべてをお嬢様の銃撃が阻む。なるほど、どうも一夏にとってお嬢様は相性最悪の相手のようだ。

この試合のポイントは、いかに一夏がお嬢様の懷に飛び込むかがポイントだな。

「……まさか、まだ一次移行していないのですか?」

なかなか鋭いな、お嬢様。一夏の動きを僅かに見ただけでそこまですわかれるとは。さすが、入学試験主席。教官を実力で倒したのも、頷ける。

「だったらなんだってんだ!」

コツを掴んだのか、お嬢様の銃撃を回避しながらも、僅かに接近する一夏。それでも、まだ剣の間合いよりは遥かに遠い。

「なるほど、そういうことでしたか……。しかし、初期状態でここまでの動きが出来るのですか。さすがは織斑先生の弟、美鶴さんの友。それとも、あなたの才能によるものでしょうか。どれにしても、残念です。もし一次移行していたら、心躍る戦いができたでしょう。それが、とても残念ですわ」

「もう勝った気でいるのかよ」

そりゃな、今のところ一方的だし。直撃こそないものの、一夏のシールドエネルギーは確実に削られてる。一夏だって距離を詰めてないわけではないが、これは一夏のエネルギー切れのほうが先だ。それに、お嬢様はまだ手札を残しているようだし。

「そうやって油断していると、足元掬われるぞ」

「ぜひ、掬ってみてください。そのほうが、わたくしも楽しめますわ」

「なら、期待にそえてやるよ！」

それから、二十七分が過ぎた。

一夏も徐々に動きはよくなってきているとはいえ、それでも白式は中破。シールドエネルギーも残り少ない。

それに対して、お嬢様はほぼダメージなし。それでも油断することなく、獅子が兎を狩るように確実に一夏を追い詰めていく。

現在、お嬢様と一夏の距離は、およそ二十七メートル。このままでは、一夏の負けで決まりだろう。そこで、一夏が勝負に出た。機体を無理やり加速させると、お嬢様に突撃を始める。

「っ！ 捨て身の特攻ですか。そんなものが通用するほど、わたくしは甘くありませんわ」

ライフルを構え、一夏を打ち落とそうとするお嬢様。だが一夏は、無理やり白式の軌道を変えることで、直撃を避ける。

だが、それは直撃を避けているだけ。銃撃は白式の装甲を破壊しているし、絶対防御こそ発動させないが、シールドエネルギーは僅かしか残っていない。またそのダメージや、機体にかかる空気抵抗や圧力は一夏を苦しめているはずだ。

それでも、一夏は止まらない。お嬢様に向かい、ひたすら突撃する。

結果は、一夏に軍配が上がった。シールドエネルギーが切れる前に、一夏はお嬢様の懷に飛び込み、加速の勢いを乗せた突きを放つ。それはお嬢様の胴を守るシールドエネルギーを貫き、絶対防御を発動させた。肉を切らせて骨を絶ったということだ。

「まだまだ」

一夏の攻撃は止まらない。剣を構え直すと、今度は切り上げるように斬撃を放つ。

その時、俺は思った。

「こりゃ、一夏の負けだな」

そう、剣を構え直す時に俺は見た。左手を閉じてはまた開いているところを。あれが出る時は、大抵簡単なミスをするのだ。

きつと、千冬も今頃同じことを考えているだろう。

「わたくしを、なめるな！」

お嬢様が吼えた。それは、およそ普段の姿からは考えられない大声だ。

一瞬で左手に近接武器、インターセプトを一瞬で展開すると一夏の剣を防ぐ。そこから、流れるような動作で蹴りに繋げ、一夏を弾き飛ばす。そこに追い討ちをかけるように、スカート状のアーマーから弾道ミサイルが放たれた。

爆風が、一夏を飲み込む。この試合を見ている観客のほとんどが、お嬢様の勝利を疑わなかっただろう。

「……つたく、あいつはマンガの主人公かよ」

そして、その結果がわかっていたのは俺と千冬だけだろう。

煙が晴れる。そして、その中からは新たな形を成した白式が現れた。フォーマットとフィッティングが終了したのだ。

しかし、この土壇場で一次移行とは。昔から無作為にフラグを立てては、それに気づかない鈍感振りと、アニメやマンガの主人公みtainなヤツだとは思っていたが。

「けど、どっちにしる勝ち目は薄いな」

それよりも肝心は、

「あの刀。雪片か」

それはかつて、千冬の専用ISの装備の名前だ。あの刀とワンオフ・アビリティが千冬を世界一に導いた。

それがどうだ。

「ワンオフ・アビリティまで同じか。さすがは姉弟。俺としたことが、妬けるじゃないか」

雪片の刀身が、光に包まれる。間違いない、零落白夜だ。本来なら二次移行しないと使えないはずだが、どういうわけか一次移行の段階で使えている。

「さてさて、どういうことだろうな」

一夏は先ほどまでとは比べ物にならない反応速度で、お嬢様の銃撃の雨を掻い潜る。

そして、

「勝者、セシリア・オルコット」

勝敗が決した。

「まあ、がんばったんじゃないの？」

一夏の試合の後。次の試合までの間に、千冬が俺の控え室に来た。敗因は、一夏のエネルギー切れ。それがなくても、四つのビットが一夏を狙ってからそれで詰みだな。まっ、お嬢様の切り札を出させたんだ。ビギナーズラックとしては上々だろう。

「どうだ、千冬。姉のしては嬉しいんじゃないか」

「織斑先生だ」

「二人しかいないんだ。硬いこというなよ」

俺の言葉に、千冬はため息をもらすと、少し恥ずかしそうに、

「まあ、そうだな。少しくらいは、褒めてやるか」

「……千冬つてさ。本当にかわいいな」

「なんだ、急に」

「いや、別に。改めてそう思ったただけだよ。」

「それで、一夏は？」

「ピットに帰ってきた途端、気絶した。どうも無理な軌道が祟ったらしい。もしかして、骨にひびくくらいは入ってるかも知れん」

「まあ、その程度で済めばラッキーだろ。下手すれば、骨が折れてたかも知れないからな。」

「今は、篠ノ之がついている」

「それで、山田先生はお嬢様。千冬は俺の様子を見に来たのか」

「そうだ」

「お嬢様の補給と休息が終わり次第、こちらに連絡が来るようになってる。そうしたら、俺の出番だ。」

「それで、本当にいいのか？」

「なにが？」

「それで、試合に臨むのか？」

「違うね。俺は試合をするんじゃない。戦いをするのさ」

「俺は、ニヤリと笑った。」

すると、千冬は呆れたように、また息を吐いた。

「お前は昔から無茶をするヤツだと思っていたが……」

「まっ、現実問題。これが一番勝率が高いと思うぞ」

「私としては、どんな状況でも美鶴がそう簡単に負けとは思えないが」

「心配してくれるの？」

「ああ。どっかの誰かさんは、恋人が弟の心配だけすると不機嫌になるからな」

「そう、千冬は笑った。くそ、この前の意趣返しだよ。意地が悪いな。」

『織斑先生、師河くん。オルコットさんの準備が出来ました。五分後、試合を開始します』

山田先生から通信が入った。いよいよ、というわけだ

「わかった。というわけだ、準備はいいな」

「もちろん」

俺は千冬に軽く答えると、軽く体を動かし解すと、アリーナへと向かう。だが、千冬が後ろから抱きしめてきて、動きを止められた。「美鶴、最後に二つ。改めていうが、私は、お前のあんな姿を二度と見たくない」

「知ってるよ」

「本当は止めたいほどだ。戦うな、ISに乗ってくれ試合をしてくれと。だが。私は止めない。止められない。それをしたら、私は美鶴が好きになった私でなくなってしまうからだ。だから、勝つて来い。私以外に負けることは許さない」

千冬が、弱さを見せた。その弱さの原因は俺で、責任も俺にある。それと同じく、強さを見せた。俺を信じるという、強さも。そこまでいわれたら、男として答えないわけにはいかないな。俺は飾らない、いつもの調子で答えた。

「当たり前だ。で、もう一つは？」

「……別に、お前が誰と関係を持つのが構わない。だけど、こんな弱さを見せる私のことを一番に想っていてくれるか？」

俺はそれには答えない。その代わり、

「まっ、これが答えかな」

「っ!？」

千冬の唇に、俺の唇を重ねる。完璧な不意打ちだ。

「そんじゃ、行ってくる。続きは今夜つてことで」

「……ああ、楽しみにしていよう」

先ほどまでとは違う、いつもの千冬らしい声で送り出してくれる。そう返されるとは、千冬も遅しくなったものだ。

しかしその前に、三年間焦らしに焦らせ続けたお嬢様と、思う存分遊ぶ(戦う)としよう。

銃対剣（後書き）

一夏がこの時点でセシリアに勝てないのは当然ですね
原作でも負け越してるし

一巻で追い詰めたのは主人公補正という解釈です

三年目の約束（前書き）

セシリア対美鶴です

この話にはかなりご都合主義が入っています
そのような展開が嫌いな方は注意してください

三年目の約束

人間とは根源的に、強さに憧れを持つ生物だと思います。

長い歴史を見ても、人間は戦いと共にありました。戦いと共にその技術を発展させ、戦いに勝つため強さを求めました。

それは時には、各地にある伝承や創作の中でも見ることが出来ます。圧倒的な力を持つ英雄、ヒーローたち。未だに小説なので新たな英雄の物語が作られるのも、その証明だと思います。

そして現実でいえば、IS。そして、織斑千冬。

ISという兵器が作られて以来、多くのものがその強さに、よくも悪くも魅了されました。世界中の各国は、より強い力を手に入れようとISの開発に着手し、その結果、世界の技術水準は上昇したでしょう。

そして、織斑千冬。世界最強のIS操縦者。現役を引退した今でも彼女に憧れを持つ者は多く、この学園に来る人物の大半は彼女に会うために入学してきます。

それを不純だとは思わない。私もまた同じだ。強さに憧れ、今まで自分を高めてきました。

ただし、わたくしが憧れる強さは織斑千冬ではありません。

私が憧れるのは、師河美鶴です。

三年前のあの日、彼の戦う姿、強さを見せ付けられ、魅了されました。

その姿は、わたくしの父親を逆連想させました。

私の父親は、情けありませんでした。婿養子ということもあり、母に引け目を感じていたのでしょう。ISが発表されて以来、それが謙虚となりました。それに対して、母は強い人でした。女でありながらいくつもの会社を経営し、成功を収めた人です。厳しく、そして、またわたくしが憧れる人物です。

だが彼は父親とは違う、その強さ。それこそが、わたくしの理想

でした。

思い出すのは、彼との最後の会話。

「俺が好き？　なんだ、俺に惚れたのか。まあ、無理もないか。俺ってかっこいいし」

そう、自分に惚れたことを微塵も疑わない。それどころか、そこが当然だと思っている。強い自惚れ、だが彼がそれをいうと自然と不快感はありません。

なぜなら、それは確かに当然なのだから。彼の強さに、魅せられない女性などいない。そう、いい切れました。

「まあ、お嬢様は見た目はいいし、なかなか見所があると思うけどな。でも、まだまだ。俺の女になるには、ぜんぜん弱いぜ。そんなじゃ、名前で呼ぶ気も起きないな」

それは、その通り。その当時のわたくしは、弱かった。自分で現状を打破する力もないほど弱く、ただの子供だった。

だから、聞きました。どうすれば、わたくしを受け入れてもらえるのかと。

「強くなれ。俺が惚れるほど、強くなれよ」

「強い女性が、好きなのですか？」

「ああ、好きだね。それで、思う存分戦いたい」

その目からは、わたくしではない、誰か、他の女性を見ている目でした。だけど、今の私には嫉妬する権利すらありません。なぜなら、わたくしは弱いからです。

だから、わたくしは決めました

「……なら、強くなります。あなたを魅せつけるほどに、強くなります」

彼がわたくしに惚れるくらい、強くなると。

「楽しみにしてるぜ」

三年間、その約束を果たすために強さを求めてきました。金の亡者から、両親の莫大な遺産を守るため勉強をしました。その一環で、適正テストでA+が出ました。遺産を守るために、政府に所属し

Sの国家代表候補生となったのです。

そこで、ひたすらに強さを求めたのです。さまざまな知識を収め、ISの操作技術を学び、女に磨きをかけました。

そして、数ヶ月前。世界初の男性IS操縦者として、彼の名前がニュースに流れたときは驚きました。そして、彼がIS学園に入学すると聞いたときは運命だと思いました。

あの時の約束を果たす。彼に、私の強さを魅せつける。

そしてその時が、ついにやってきたのです。

俺がピットを出ると、すでに上空にはお嬢様が待っていた。

「よう、待たせたか」

「ええ、ほんの少し。ほんの三年ほど、待ちましたわ」

俺は恋人との待ち合わせに遅れた彼氏のように、お嬢様に声をかけた。それに、お嬢様は冗談交じりに答える。

「あまり、女性を待たせるものではありませんわよ」

「女性つてのはデートの準備に時間がかかるものだと思っていたんだよ」

それは、まるで恋人との会話のようだ。だが、それは決定的に違う。

お嬢様はISに搭乗し、ライフルを油断なく構えている。

「ところで、どうでしょうか。わたくしのブルー・ティアーズは？」

「青がお嬢様によく似合っていると思うよ。あと、ISスーツってボディラインが浮き出るからエロイよな」

「なんだか、褒められているのかセクハラされているのか微妙ですわね」

失礼な。心からの賛辞だよ。いいね、あの太もも。むしゃぶりつきたい。

「美鶴さんこそ、昔と変わりませんわね。もう少し、着飾ったほうが

よろしいのでは？」

「悪いね。元がいいから、あまり服装には頓着しないんだ」

俺の格好は、動き易さと丈夫さを合わせ持つ黒の戦闘服に、防弾耐寒耐熱を追求し多くの収納スペースを持つコート。通信や暗視など多目的機能を持ったゴーグルで、顔の半分は隠れている。そして1.5メートルほどのライフルを肩で担ぐように持っている。

その姿は、初めてお嬢様の前で戦ったときと同じだ。違うのは、あの時はお嬢様を守るために戦ったが、今度は倒すために戦うということだろう。

『し、師河くん！？ 何してるんですか、早くISを装着してください！』

ゴーグルから、山田先生の声が聞こえてくる。見れば、観客も騒ぎ立っているようだ。それも、当然か。

俺はISに、ISに乗らずに挑もうとしているのだから。我ながら、正気を疑うぜ。

「まっ、いつまでも話してるのもなんだな。そろそろ、始めるか」

「ええ、そうですね」

そして、

「さあ、戦おう」

「さあ、戦いましょう」

互いのライフルから、同時に銃撃が放たれる。それと同時に、互いが横へ跳んだ。

瞬間、俺にはレーザーが、お嬢様には実弾が襲い掛かる。

俺はレーザーが地面に着弾した余波を利用し、さらにもう一步地を蹴り跳んだ。ゴーグルの右レンズには、連動しているライフルのスコープから視覚情報が送られてくる。それを下に跳びながら、駆けながらお嬢様へ銃弾を放った。

「やっぱ、モニタで見るよりも速いな」

レーザーから逃げるように走り出す。もちろん、反撃するのも忘れない。ヒットアンドアウェイを心がけた戦法。性能差がありすぎ

るISと生身では、回避に専念して少ない機会を掴むしかない。

隙を見つけては、飛翔するISに銃撃を放つ。そのうちの一発が、お嬢様を捕らえた。それはISのシールドを突破し、絶対防御こそ発動させないが、機体の一部を破壊した。通常の銃器ではありえないことだ。

「さすがに、正確な射撃ですわね。それに、ISのシールドを貫くなんて。アンチマテリアルライフルかと思いましたけど違いますわね」
正確には、アンチISライフル。先週、電話で頼んでいたものはこれだ。既存のIS用ライフルを人間が使える大きさにしたのはいいが、反動が大きすぎて常人には使えなくなったという一品だ。多分この学園で満足に使えるといったら、俺と千冬と山田先生くらいかな。

「なら、わたくしも全力で行きますわ」

お嬢様が、腰部から弾道ミサイルが放たれる。あれ、当たったら怪我じゃ済まないよな。

「うんじゃ、逃げますか」

俺はミサイルに背を向けて逃げ出した。といっても、ミサイルは俺をまっすぐに追いかけてくるし、そのスピードは俺より速い。徐々に、俺との距離は狭くなる。そして後少し、あと少しで俺を捕らえるというところで、俺は跳んだ。そして背後を向きながら、ミサイルへと銃弾を一発撃ち込んだ。結果、ミサイルはもう一つのミサイルも巻き込む形で爆発した。

俺は爆風に煽られながらも受身を取り、地面を転がる。熱はコートが防いでくれるが、衝撃はそうではない。確実に、俺の体を痛めつける。

「やばいな……」

だが、俺の顔に浮かぶのは苦痛ではない。笑みだ。獰猛な、獣のような笑み。

すごく楽しい。死ぬか生きるかの瀬戸際で、命をかけて戦う。こんな気分は久しぶりだ。自然と、口に笑みが浮かぶ。

「楽しそうですね」

「ああ、お互いにな」

見ると、上空ではお嬢様が笑っていた。その顔つきは、貴族のお嬢様の顔などではない。間違いなく、戦う者の顔だ。

「では、お次はこれでどうでしょう」

瞬間、俺はその場から離れた。俺の中のなにかが、その場を離れると叫んだ。急に動いたせいで体に負担がかかるが、そんなことは気にしてられない。

それとほぼ同時、俺の背後、先ほどまで俺がいた場所にレーザーが放たれる。死角からの、ありえない攻撃だ。

「さすがに避けますか」

「おいおい、なんだこれ」

見ると、俺を包囲するように四つのビットが浮かんでいる。それは、先ほどまでお嬢様のISについていたはずの部位だ。

「さあ、踊りましょう。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

「ああ、喜んで。お嬢様！」

四つのビットより、レーザーが放たれる。

単純に考えて、今までの四倍の手数だ。一夏には使わなかった武装。まちがいなく、これがお嬢様の切り札で、全力だ。

降り注ぐ銃撃は、まるで銃雨ともいうべきだろう。せめて死角からだけなど、わかり易い攻撃ならいいのだが、そんな単純なものではなく、四方あらゆるところから俺を攻めるから、それを避けるのが精一杯だ。せめてレーザーライフルの射撃なら、まだなんとかなる。俺だって、親父ほどではないが、相手の意思を感じ取り攻撃を先読みできなくもない。だが相手がビットではそれも難しい。なにせ、攻撃を命じる者と攻撃が来る場所が別なのだから。かろうじて放つ銃弾も、体勢が安定しないせいか僅かにブルー・ティアーズをかするのみ。このままじゃ、いつかレーザーに貫かれるか、俺の体力が尽きる。

「……っ！」

額に痛みが走った。どうも、レーザーの衝撃で地面より小石が飛び、額を切ったらしい。額が切れ、血が流れ落ちる。

戦いで、血を流す怪我をしたのは久しぶりだ。それだけ、お嬢様が強敵だということだろう。

いいな、ますます楽しくなってきたぜ。それこそ、まるでいい女と熱い夜を過ごすように。今にも、イッてしまいそうだ！

「だけど、攻められっぱなしは俺の主義じゃないぜ」

俺はMじゃない。Sなんだよ。

チャンスはある。どうもこのビットを操っている間は、お嬢様はそれに集中するためにライフルで攻撃が出来ないらしい。それが装備上の欠点なのか、お嬢様が未熟なのかはわからないが、確かな隙だろう。

そしてもう一つ。どうにも、一夏の時よりも威力がない気がする。最初はライフルではなくビットだからと考えたが、それでもないらしい。おそらく、命中しても最低限死なない程度に調整しているのだろう。死にはしないなら手はある。

俺は、勝負に出るべく走り出した。襲い来るビットのレーザーは気にしない。一夏だって、これくらいの無茶はしたんだ。俺がしないでするんだよ！

「なにを考えているか知りませんが、関係ありませんわ。どんな策だって、わたくしのブルー・ティアーズが撃ち抜きます！」

四つのビットが同時に光る。ビットの向きを確認。それより、レーザーの軌道を予測する。俺はもっとも被害が少ない場所を予測し、レーザーの雨に飛び込んだ。体の数箇所に、熱のように痛みが走るが、それだけだ。ダメージこそあるが、まだ十分戦える。レーザーが地面に命中し爆風が起きると、俺はさらに加速した。そして向かうは、

「もらったぜ」

俺はお嬢様の真下にすべり込むように跳ぶと、無理やり体を捻り

真上を向く。お嬢様の形のいいヒップが見えた。

そこで、俺はライフルを放つ。

本来なら死角である場所から放たれたそれは、ハイパーセンサーがあるにしても、お嬢様の反応を遅らせる。

銃弾は機体を捕らえたが、それは足の装甲を僅かに破壊するだけでとどまった。だが、空中という隙だらけの場所にいる俺へ、次の攻撃はなかった。

ライフルは使えない。ビットでの攻撃も、今の銃撃で集中力を乱されたためか遅れている。

ならば、ここが使いどころだ。

俺は地面を転がりながらコートよりボールのような物体を取り出すと、お嬢様へと投げつけた。

お嬢様は反射的にだろう。自分へと向かうそれを、ビットの一つを使い撃ち落した。

素早い反応。そして、体に浸み込んだ対応だ。それを行えるようになるまで、どれほどの研鑽を積んだのだろうか。その努力は、尊いものだ。

だが、今はそれが裏目に出る。

レーザーがボールを貫いた瞬間、光が弾けた。その強烈な光は会場全体を照らし、観客の視界をしばらくの間奪った。

そして、もっとも被害を受けたのはお嬢様だろう。

ISにつまれているハイパーセンサーは、搭乗者の視界を強化する。それは、数百メートル先の、人間の口の動きを捉えるほどだ。だがそれは逆にいえば、見たくないものも見えてしまうということだ。

俺が放ったフラッシュバンは、完璧にお嬢様の不意をついた。そして、ハイパーセンサーの見えすぎる能力もあり、お嬢様の視力を完璧に奪った。だが、それでは不十分だ。これくらいなら、ISはすぐにお嬢様の視覚を回復させるだろう。

なので、すぐに次の行動に移る。

俺は空になったライフルのマガジンを変えると、ビットへと銃弾を放つ。本体から離れたビットに、シールドはない。銃弾はやすやすとビットを貫き、破壊した。

ビットより、無作為にレーザーが放たれる。だが、そんな射撃では到底俺は捕らえられない。

俺は乱発されるレーザーを避けながら、確実にビットを落とす。一つ、また一つ。

そして、最後の一つ。その一つがレーザーを放つが、それは俺を狙うでもなく明後日の方向へ飛んだ。まだ、視力は回復していない。俺はそれを確認すると、最後のビットをライフルで狙う。

さて、ここでいい訳をしておこう。俺は、別にお嬢様を舐めていたわけではない。むしろ、強敵とさえ思っていたほどだ。ISに乗っているとはいえ、お嬢様は確かに強かった。だから、俺が勝つたらオルコット、と苗字で呼ぶくらいはしようかなと考えていた。しかし、それこそが油断だったんだろう。まあ、俺もまだまだ子供。自分の力を過信しすぎたツケというわけだ。

さて、なにがいたいのかというとな。

俺が避けたはずのレーザー、それが弧を描き、背後より俺を飲み込んだ。

強い。それは最初からわかっていたことですが、相手にしてみても改めて実感しました。

生身でありながら、わたくしの銃撃を避け。体勢を崩しながらもわたくしに反撃する。その射撃はわたくしのシールドエネルギーを確実に減らします。あんなアクロバティックな動きをしながら、この正確さ。尚且つ、あれほどの威力のライフル、どれほどの反動を持つのかもわからないものを扱ってである。重火器については美鶴

さんに分があるとは思っていましたが、これには舌を巻かざるを得ません。

さらに、的確な判断で、最善の手を打つ。わたくしにはない、多くの戦闘経験からくるものでしょう。

そしてなにより、戦いを楽しんでいます。

IS対人間。明らかに不利で、一歩間違えば怪我では済まないこの状況で、彼は笑っているのです。

万が一のためにレーザーの出力を下げてこそいますが、それでも地面の形を変える程度の威力はあります。当たればその結果は、いうまでもありません。

にも関わらず、笑っています。それはまさしく、三年前に見た彼の姿。わたくしが懂れた、戦士の顔。

だからこそ、わたくしも笑いました。この心躍る戦いを、思う存分楽しみました。

彼の一手にわたくしが答え、わたくしの手に彼が答える。

この瞬間、この場所にはわたくしと美鶴さんしかない。観客も誰も、織斑千冬でさえ、わたくしたちの邪魔は出来ない。美鶴さんはわたくしだけを求め、わたくしは美鶴さんだけを求めました。それがとても嬉しく、幸せだった。

わたくしたちは恋人のように、互いを求め合ったのです。

音楽はライフルとブルー・ティアーズの銃撃音。踊るのは、わたくしと美鶴さん。何時までも、この円舞曲を踊っていたい。そう思いました。

ですが、終わりの時が来たのです。

わたくしの視界が白に染まったかと思うと、瞬間、暗闇に閉ざされました。

すぐに美鶴さんの策に嵌ったと理解したわたくしは、ビットで銃撃を始めました。命中など考えない、視力が回復するまでの時間稼ぎです。

ISの生体機能補助の役割が視力を回復させると、ちょうど美鶴

さんが三つ目のビットを破壊したところでした。

すぐに反撃に出ようと思いましたが、その案を却下します。ここでビットに美鶴さんを攻撃させても、避けられるでしょう。

現状では、わたくしが不利。ですが、まだ最後の札があります。そして、美鶴さんはまだわたくしの視力が戻ったことに気づいていない。美鶴さんがフラッシュバンを使ったように、わたくしもここで切ることを決めました。

不安があります。これはまだ制御が完全ではなく、大事になる可能性さえあります。

ですが、ここで負けるのはお断りです。

織斑さんも美鶴さんも、死地に活路を見出しました。ならば、わたくしもできない道理はない。

四つ目のビットの出力を最大に。これが直撃すれば美鶴さんといえどただでは済まないの、狙うは美鶴さんの足元。衝撃で意識を奪うことを狙います。

大切なのは、イメージ。策が成功するのを想像し、何より、勝利を想像する。

そして、レーザーが放たれました。その攻撃に当然美鶴さんは反応しますが、それは美鶴さんを狙うのではなくまったく別の方向へ飛んで行きました。

そこで美鶴さんは、ビットヘライフルを向けます。

だけど、それこそがこの攻撃の意図。レーザーは、いや、銃弾は直進するものという常識の裏をつく不意の一撃。

レーザーは弧を描くように旋回しました。

B T偏向制御射撃、フレキシブル。これが、わたくしの本当の切り札です。

わたくしの狙い道理、それは美鶴さんの背後より迫り、美鶴さんを飲み込みました。

今までにない、破壊音。美鶴さんは爆風で起きた埃と煙で姿が隠れてしまいます。

ビットを最大稼動しての射撃です。もちろん威力も、今までで最大。

「し、師河くん！？ 医療班、すぐに師河くんの救助に向かってください！」

山田先生の声が聞こえる。わたくしたちが通信を無視するから、スピーカーに切り替えたのでしよう。

だが、わたくしはまだ油断はしません。確かに、わたくしの策は成功しました。

しかし、あっけなさ過ぎる。美鶴さんがここで終わるはずがないと、わたくしには確信がありました。

そこで、

「っ！？」

全身に、悪寒が走ります。今までにない感覚。……いえ、これは覚えがあります。三年前も感じた、感覚。

その名前は、畏れです。強者が放つ、絶対的な気配です。

それは地上、美鶴さんが立っていた場所から感じられました。

そしてそこから、

血のように紅い眼が、わたくしを見つめていたのです。

三年目の約束（後書き）

この二次創作で書きたかった話の一つ。人間対ISがテーマです
もちろん、ご都合主義のтонでも展開のチート主人公です
くり返しますが、ここまで読んで不快な方は引き返してください
受け入れてくれる方は、続きをどうぞ

決着。そして……

「し、師河くん！？ 医療班、すぐに師河くんの救助に向かってく
ださい！」

山田先生が、血相を変えてマイクに叫ぶ。

それも当然。教え子が生身でISと戦闘をしているのだ。これで
心配しないというのなら、教師失格だろう。

そしてそれは、私も同じ。もともと、美鶴の戦闘には賛成できな
い。これが生身対生身やIS対ISならば問題ないが、これは話が
別だ。

思い出すのは、第二回モンド・グロツソ決勝戦の日。思い出した
くない、忌々しい記憶だ。トラウマといってもいいかもしれない。

だが、私は美鶴を止められなかった。美鶴は戦いを邪魔されるこ
とを嫌っているし、それは私も同じだ。私も同じ、良くも悪くも戦
士なのだから。

試合中もそうだ。美鶴が危険な動きをするたび、試合を止めよう
と思った。しかし、美鶴とオルコットの戦いを見るうちに、止めら
れなくなった。

互いに、楽しそうに戦う姿。常識からかけ離れた、その圧倒的な
戦い。人間は強さを恐れる生き物だ。だが、それは生半可な強さの
場合。人が安易に想像できるような弱い強さだ。だが、それを超える
強さ、戦いは人間を魅了する。例えるならば、テレビで放映される
ような格闘技の試合。本来、暴力と蔑まれても可笑しくない格闘技
も、強者と強者のぶつかり合いえは人を虜にし、惹きつける。

そして、今繰り広げられている戦いだ。最初は騒いでいた観客も
次第にその光景に魅了されていった。

それは、私も同じ。その光景は、弟と同じ年の少女に嫉妬するほ
どにだ。この戦いは、美鶴だけでは成り立たない。それと相對する
強者が存在するから成立し、惹きつける。私ではない、別の戦士。

私以外に、美鶴を惹きつける女だ。

ふと、自虐的に笑みを浮かべる。

何がブリュンヒルデだ。私も、ただの女ではないか。

「織斑先生！　なに笑ってるんですか！？」

「山田先生、救援の必要はない。レーザーは師河に直撃していなかったし、直前で回避運動をしていた。そこまで心配する必要はないだろう」

嘘だ。今すぐ美鶴の下に向かいたい。だが、向かわない。

思い出すのは、あいつの言葉。

「恐怖を感じる？　ならば、戦え。戦士ならば、戦うことで解決できるはずだ」

ならば、私も戦士として戦おう。この恐怖に、負けなかったために。

美鶴が好きでいてくれる私であるために。

身体情報確認。体の全身に強い痛み。爆風の衝撃と飛礫によるものと判断。コート上からだったため貫通はなし。ただし骨折、もしくはヒビが入っていると思われる部位数箇所。ゴーグル右レンズ破損。ライフルスコープとの接続遮断。頭部に痛み。傷が広まったと考えられる。ライフルに破損あり。残り数発が限度と思われる。以上、戦闘中止を推奨。

自己分析としてはこんなもんだろう。

結果としては、お嬢様にしてやられたわけだ。まさかレーザーが曲がるとはな。ISに常識は通じないってことか。

俺は立ち上がりながら、上空のお嬢様を見つめる。

ああ、すばらしいな。まさか、ここまでとは思わなかった。

千冬にも、楯無にも劣らない。……いや、ここで他の女の名前を出すのは無粋だろう。

ああ、認めるさ。俺は、お嬢様に惚れちまったようだ。いや、も

うお嬢様とは呼べないか。

「やはり、まだ立ち上がるのですね。そうでなくては、わたくしが追い求めていた美鶴さんではありません」

ゴーグルより、お嬢様の声が聞こえる。いや、違うな。頭の奥から聞こえてくるような感じだ。

「それに、その眼。やっと、本気になってくれたということでしょうか？」

「……ああ、そういうことか」

道理で、こんな怪我だらけで立ち上げれる訳だ。

俺は生命の危機に陥ったり、気分が高鳴ると目が紅くなり、身体能力が上昇する。理由はわからないが、原因は予想がつく。まあ、ドーピングみたいなものだと思えばいいさ。

他の観客たちには見えないが、対峙しているお嬢様にはレンズが破損したことで見えるのだろう。

そういえば、この眼を初めて見せたのもお嬢様だったか。

「なあ、再開しようと思うんだけど、その前に聞きたいことがあるんだ」

「なんででしょうか？」

「名前、聞いてもいいか」

「っ！」

お嬢様が、弾かれたように俺を見る。言葉の意味は、理解できたようだ。

ああ、そうだよ。そういうとき。わかってるんだろ、お前にはだから、いえよ。それだけでいいんだ。

さあ！

「……セシリア。セシリア・オルコット。それが、わたくしの名前ですわ！」

そうセシリアは名乗った。嬉しさを抑えきれないのだろう。顔はこれでもというほど笑顔で、とても魅力的だった。

「セシリア、好きだぜ！」

「わたくしもですわ、美鶴さん！」

それと同時に、俺たちは動いた。

ビットが、俺の背後より狙いを定める。だがそれは、俺には見えていた。

振り返ることもせず、ライフルだけを背に向け、ビットを撃ち落す。

「背後を見ないで!？」

ああ、そうだよ。見ていないさ。でも、見えている。今の俺には、三百六十度すべてが見えているんだ。

ビットはすべて破壊した。だが、ライフルの破損も大きい。これ以上使うのは危険だろう。

俺はライフルを捨てると、リボルバーを取り出しセシリアに向ける。それと同時に、発砲した。

リアスカートよりミサイルが発射されるが瞬間、それは弾丸に貫かれ爆発した。それによりミサイル発射口を破壊し、セシリアのシールドエネルギーが削られる。

「今までよりも速い！」

それは当然だ。このリボルバーは長年愛用しているものだ。ISには威力が不十分だったために使わなかったが、速さと正確さだったらライフルなどと比べ物にならないさ。

セシリアはライフルを構えなおすと、俺へと撃つ。だが、無駄だ。俺は先ほどまでよりも何倍も速く、地を駆ける。その速度はISにも劣らないかもしれない。

だが、これはドーピングだ。時間制限も、その後の反動もある。何時までも避けているだけでは、ダメだ。

俺はセシリアに向かい合うように立ち止まると、リボルバーを構える。

「勝負だ、セシリア！」

「望むところです！」

セシリアと俺が、同時に動く。

世界が静止したと思うほど、時間がゆっくりになる。狙う、一つだけ。

互いに銃口を向け合う。そして、引き金を引いた。勝負の差は、コンマ数秒。だが、音速に達する銃弾の速さの前には、それが決定的な差だった。

俺の放った銃弾は、セシリアのライフルの銃口を貫いた。

ライフルが破裂し、その爆発がセシリアのシールドを大幅に削る。銃弾では、たいしたダメージは与えられない。だが、ライフルを破壊するくらいは十分可能だ。

「まだまだ！」

セシリアの叫びが響いた。爆発の中より、インターセプトを構えたセシリアが急降下してくる。

「勝つのは、わたくしです！」

速い。そう思った瞬間には、セシリアは俺に肉薄していた。

振るわれるインターセプト。反射的に、それに銃弾を撃ち込む。

両者の武器が弾かれ、宙を舞う。

右手に痺れるような感触。しばらくは使い物にならないだろう。

「来いよ！」

「ああああああ！」

セシリアは拳を振り上げる。だが、構えが大きい。

もともと、ISによって大柄になっているのだ。懐に入るには十分だ。

セシリアの腹部を、左手で殴りつける。手には、何かに阻まれるような感触。これがシールドなのだろう。

だが、そんなことは気にしない。足を踏み込み、腰を入れ、全力で振りぬく。

「うらあああああああ！」

それはシールドを貫き、腹部に当たる瞬間に絶対防御を発動させた。俺よりも巨体なはずのISが、宙を力なく飛んだ。そして背中から落ちると、地面を滑るり、止まった。

『……勝者、師河美鶴!』

ブルー・ティアーズのシールドエネルギーが空になり、スピーカーから山田先生の声が響いた。

会場が、沸きあがる。途端に、アリーナに救急班が入ってきた。

セシリアのISが消えて、待機状態に戻る。

これで、試合は終わりだ。生身でISに勝つという、常識外れなことをやってのけた俺は、少しは喜ぶべきなのかもしれない。

だが、まだだ。まだ、終わっていない。

「そうだろ、セシリア」

「当然、ですわ」

セシリアは、笑って立ち上がった。ISに乗っていても、疲労は溜まる。それにセシリアは、俺の前に一夏とも試合をしたのだ。すでに、満身創痍といった様子だ。

それは、俺も同じ。すでにドーピングの効果は切れ、一気に痛みが押し寄せてきた。今にも、倒れそうなほどだ。

だが、まだ終わっていない。試合は終わったかもしれないが、戦いはまだ終わっていない。

「あと、一発つてところか」

「そう、ですわね。女性を、ここまで傷つけるなんて。紳士として失格ですよ」

「そうか? 以後気をつけるとしよう」

お互いに、冗談をかます。そんな余裕はないのに、そんな状況でもないのに。

まるで恋人が互いを茶化すように、笑った。

瞬間、互いに駆け出す。相手だけを見つめて、走り出した。

全身が悲鳴を上げる。体が軋む。骨が悲鳴を上げ、止まれと叫ぶ。だが、止まらない。止められはしない。

「セシリア!」

「美鶴!」

ここまできたら、性別による体格差や腕力など関係ない。どちら

も、一撃で終わりだ。勝敗を決めるのは、意地と執念だ。

拳と拳がぶつかり合う。痛みが腕を伝わり、全身に響いた。

それに耐えると、俺はセシリアを見る。すると、眼が合った。透き通ったブルーのきれいな瞳だ。

その眼が、すべてを語っていた。

「なにか、いうことは？」

俺が聞くと、セシリアは柔らかに笑う。

「……次は、負けませんわ」

そして、セシリアが崩れるように倒れた。俺はそれを抱くように支える。

意識のないセシリアを優しく、包み込むように抱いた。柔らかに暖かい。撫でるように髪の毛に触ると、いいにおいがした。俺とは違う、セシリアの匂いだ。

それあ、妙に恥ずかしくて、気持ちよくて……。

そこで、俺の意識は途絶えた。

「……ん。っ!？」

眼が覚めたらと思ったら、全身に痛みが走った。もうどこが痛いのかもわからないほど、隈なく全身が痛い。

眠気など一気に吹き飛び、強制的に覚醒させられる。

「起きたか」

その声は、千冬のもんだ。見ると、ベッドの横の椅子に座っている。

「ここは？」

「医務室だ。何があつたか覚えているか？」

「……大体な」

そついいながら、記憶を整理する。セシリアが気絶して、それを

支えて、俺も限界が来た。まあ、そんなところだな。

「情けない。まさか意識を失うとはな」

「それはしょうがないだろう。眼が、紅くなった影響もある」

「わかるのか？」

モニターから見られでもしたか？

「体の傷が回復している。少なくとも、重症レベルの怪我はない。それがなければ、今頃暢気に寝てられないだろう」

体の異常な回復力。これも、眼が紅くなったときに起こる現象だ。本来なら重態でもおかしくない戦いのあとなのに怪我は少ない。そこから、千冬は予測したのだろう。

「千冬、ありがとな」

「なにがだ？」

「途中で戦いを止めなかっただろ？」

正直、教師としては何時止めてもおかしくない内容だ。

「何だ、止めて欲しかったのか？」

「まさか」

もし止められてたら、俺は千冬を嫌いにこそならないが、それでも、失望してしまうところだろう。まったく、自分勝手な性格だな。「なら、気にするな。私は戦士として自分の弱さと戦い、美鶴の恋人として当然のことをしただけだ」

「千冬」

「なんだ？」

「愛してるぜ」

そういうと、千冬は表情こそ変えないが、恥ずかしそうに顔を赤くする。それが、とてもかわいかった。

「……何か聞きたいことはあるか？」

「セシリアは？」

「オルコットなら、もう回復して部屋に戻った。肉体的損傷は打撲程度だ。気絶したのは、精神的疲労からだな」

それを聞いて、安心した。さすがに、俺以上の怪我などといわれ

ては寝覚めが悪い。

「それで、戦いを見た感想は？」

山田先生なんかは、終始顔を青くしていただろうけど。

「俺に惚れ直したりした？」

「ああ、した。オルコットに嫉妬するほどだ。悪いかな？」

顔を赤くしながら、俺を睨んでくる千冬。

「ああ、そうさ。年下の小娘に、年甲斐もなく嫉妬したさ。まったく、私というものがあいながら、どうしてそう気が多いんだ」

「しょうがないじゃん。そういう性格なんだ」

「ああ、しょうがないさ。だからだ、私がこれから憂さ晴らしに何をしようと美鶴には関係ないな」

あ、嫌な予感。どうにも、千冬の顔が笑っている気がする。
「っ！？」

千冬が、俺の体に触れる。途端、全身が痺れるように痛んだ。

「どうだ、痛いだろう。痛くて、体は満足に動かせないな」

「ちょ、ちよつと待て。何する気だ！？」

「なんだ、忘れたのか？ 続きは後で、と誘ったのは美鶴だろう。存分に楽しもうじゃないか」

「俺は楽しくないぞ！」

「私は楽しいので問題ない。全身に痛いほど、私のすばらしさをわからせてやろう」

「ふざけるな！」

俺は無理やりするのは好きだけど、逆は嫌なんだよ。どうにも、嫌な思い出が蘇る。

「誰かいらないのかよ！」

「美鶴の看病は、私がすると伝えてある。誰にも邪魔はさせないさ。お前も男なら、過去の悪夢くらい乗り越えて見せろ」

これは、もう何をいっても無駄だ。諦めるしかない。

「千冬」

「なんだ？」

「優しくしてね」

「ああ、善処しよう。愛してるぞ、美鶴」

翌日、朝のショートホームルーム前。

未だに全身は痛むが、それでも昨日ほどではなく、日常生活にも問題はない。

あと、千冬になら無理やりされるのも悪くなかった。

「あの、師河くん。握手してください」

「どうすればあんなに強くなれるんですか？」

「オルコットさん。お姉さまと呼ばせてください」

「ぜひISの操縦の秘訣を……」

俺とセシリアは、朝からこんな感じだった。

どうも、昨日の戦いを見てくれた生徒たちが押し寄せてきているようだ。

「まいったな。俺のかつこよさは隠せるものではないか。モテる男は辛いぜ」

「お前、すごいバカなこといつてるな」

うるさいな、一夏くん。女の子の人気を独り占めしてるからと嫉妬するもんじゃないぞ。それに、お前には箒がいるだろ。

「何で箒が出て来るんだよ？」

「さあ、何でだろうな」

そこに、千冬と山田先生が入ってくる。

「他のクラスの者は散れ」

その一言で、教室は何時もの様子に戻る。さすが、といったところだろう。その教師ぶりは、普段のだらしない姿からかけ離れている。なかなか、上手く猫を被っているものだ。

「何かいいことでもあるのか？」

「何もありません、織斑センセ」

まだ何かいいたそうな顔だが、それでも山田先生へと向き直ると、

「山田先生。ホームルームを始めてくれ」

「はい。それでは、クラス代表のことからです。一年一組代表は織斑一夏さんに決定です。あ、一繋がりでいい感じですね!」

嬉々として話す山田先生。そこまで面白いことでもないと思うが。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「なんで俺がクラス代表なんですか?」

「それは、師河ちゃんとオルコットさんが辞退したからです」

「なんでだよ!」

なんで、つていわれてもな。

「なんか、めんどくさそうだし」

もともと、セシリアと戦いたいから決闘を受けたみたいなものだし。

「なら、俺に勝ったセシリアは?」

「残念ながら、わたくしはさらに自分に磨きをかけ倒さなければならぬ相手がいるのです。申し訳ありませんが、クラス代表という責務を全うする時間ありませんの」

そこでセシリアは意味ありげに千冬を見ると、

「よろしいでしょうか、織斑先生」

「ああ、いいだろう」

きつと、マンガなら互いの視線がぶつかって火花が散っているところだろう。

教室の温度が下がった気がした。

「そ、そういうことで。織斑くん、お願いしますね」
場を取り成すように山田先生が笑った。

「……マジかよ」

「まあ、がんばれよ」

「他人事だな」

「他人事だよ」

まあ、サポートくらいはしてやるよ。

「まあ、いいじゃん、世界で二人しかいない男子なんだから。それを持ち上げないと」

「私たちは貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、織斑君は」

うん、クラスのみんなも乗り気なようでよかった。

「案ずるな、一夏」

「箒、お前は俺の味方だよな」

「これからも、クラス代表に恥じないよう厳しく鍛えてやる」

これで、一夏の味方はいなくなったわけだ。いや、箒もたくましくなったな。

「それでは、クラス代表は織斑一夏。依存はないな」

クラスが一丸となって返事をする。

すばらしい。一夏以外、今日もいい日になりそうだ。

決着。そして……（後書き）

これで一巻の前半部分は終わりです

次回より、鈴登場ですね

この話にはよく戦士という言葉が出てきますが、好きな小説のパロ
だったりします。それ関連のキャラもそのうち微クロスとして出て
きます

その他にも微妙にパロディやクロスを入れる予定です
それでは、感想お待ちしています

女の戦い（前書き）

鈴のキャラが掴みにくい

女の戦い

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

あれから日が経ち、桜もすべて散った頃。今日も今日とて、俺は授業を受けていた。

どうやら、一夏もセシリアも大した怪我はなかったようで、今では何の問題もなく授業を受けている。

俺も、ほぼ全快だ。強いていれば、まだ腕に違和感を感じる程度だろう。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
しかし、あれだね。ISスーツというのはすばらしいね。

女性の体のラインがくつきり浮き出る。貧乳、巨乳、美乳と眺め放題。ヒップや腰周り、腿や腕も重要だ。改めて、この学園に入っ
てよかったと実感するよ。

どうせなら、千冬もジャージではなくてISスーツを着てくれればいいのに。最近見ていないので、久しぶりに見たいもんだ。

「師河、何を考えている」

「いえ別に何も」

俺の邪念を読み取ったのか、千冬に睨まれた。ああ、恐ろしい恐ろしい。

そんなバカなことを考えている間に、セシリアと一夏はISの展開を終えた。

一夏は時間がかかったが、セシリアはさすがというべきか。一瞬の間にISを展開し終わった。まるで戦隊物のヒーローみたいだな。俺も変身とか叫んでみるか。

「よし、飛べ」

セシリアは素早く行動した。急上昇し、すぐに地上からは満足に見えなくなる。ゴーグルの望遠機能を使わなくては見れないほどだ。

大体、二百メートルというところか。決闘であれだけの高度を取られなくてよかった。負けはしないが、勝つことも難しくなっていただろう。

ちなみに、俺の今の姿は一夏と同じデザインのISスーツ。それに、戦闘用のブーツとグローブ。腰にはリボルバーと予備の銃弾で最低限の武装。さすがに止められたが、普段から身に着けている俺としては、これがないと落ち着かない。無理をいって許可をもらったのだ。

あとは、修理に出したゴーグルだ。普段は頭にかけるだけだが、今はセシリアたちの姿を捉えるために顔まで降ろしている。

閑話休題。

一夏もセシリアを追うように飛ぶが、どうにもぎこちない。やはり、まだ飛ぶというイメージが掴めていないのだろう。

上空では、セシリアと一夏が会話している。口の動きから、どうも飛行のコツを教わっているようだ。

反重力力翼や流動波干渉なんて一夏には理解出来ないと思うぞ。

「上で二人は何をしているんだ？」

隣で上空を見上げていた箒が聞いてくる。そんなに眼を凝らしても、豆粒程度にしか見えないだろう。

「大した話じゃない。気になるのか？」

「まあな。私は嫉妬深いんだ」

そう、慔然と答える箒。それが、少し意外だった。

「へえ、ずいぶんはつきりいうじゃないか。昔のお前なら、一夏が他の女というだけで不機嫌そうに怒ってるぞ」

「セシリアは美鶴の彼女だろ。なら心配はいらない、ということもある」

「他にもあるのか？」

「いい加減、私も立ち止まっているのは疲れたんだ。そろそろ歩き出そうと思ってな」

そう、箒は笑った。

入学した頃の箒からは考えられない言葉だ。暗く、濁っていて、他人を嫌い、自分を嫌っていた、棘のある箒からは。

「何があつたか知らないが、いいんじゃないか。今の箒なら、うっかり告白するかも知れないぜ」

「抜かせ。私は浮気者は嫌いなんだ」

「それは残念」

「そこ、授業中に私語をするな！」

千冬に怒られたことで、会話は中断する。互いに苦笑し、肩を竦めた。

「織斑、オルコット。急降下と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

その言葉に、セシリアはほとんど地上に降りてきた。そして、完全停止も難なくクリア、と。さすがは代表候補生。いや、セシリア・オルコットといったところか。

次に一夏が降りてくる。が、今度はセシリアのように上手くはいかず、地上にクレーターを作る結果となった。

「大丈夫か、一夏！」

「ああ、なんとかな」

箒が穴に駆け寄ると、一夏が這い出てきた。

「そうか。だが、情けないぞ。昨日私が教えただろう」

安心したような、呆れたような複雑そうな表情の箒は、手を伸ばし一夏を引きずり上げた。

「サンキュ、箒」

「うむ！」

箒は照れを隠すように、慚然と頷いた。

「あら、なかなかいい雰囲気ですわね」

セシリアが、微笑ましい物を見たような顔で近づいてくる。

「さすがだな。当たり前だが、一夏と大違いだ」

「ありがとうございます。ですが、織斑さんならすぐに強くなりますわよ」

「わかるか？」

「ええ、一度戦いましたから」

ま、あいつは色々と素質があるからな。主人公補正とか。

「でも、俺には負けるけどな」

「わたくしには劣りますけど」

お互いに、笑った。それは、一夏を見下しているのではない。ただ、負けず嫌いなだけだ。

そう簡単には負けてやらないという、意志の表れだ。

「篠ノ之、そろそろ戻れ。織斑、次は武装展開をしろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

「は、はあ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし。でははじめろ」

一夏は右手を伸ばすと、意識を集中する。そして光が放出され、手には雪片式型が握られていた。

「師河」

「え、俺？ なんですか？」

一応敬語ではあるが、誠意のこもっていない声で返事をする。

「織斑が武装を展開する間、お前ならその銃で何発銃弾を放てる？」

「条件にもよりますが、互いに静止している状況なら全弾撃って、弾の再装填までできますね」

戦闘中でも、今の一夏になら少しの間があれば全段当てることくらいはできるか。本音をいえば、武装以前にISを展開する隙に一発で終了だけど。

「そういうことだ。最低、0.5秒で出せるようになれ」

さすが千冬、厳しいね。まあ、俺も同じこというだろうけど。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

といった瞬間には爆発的な光が放たれ、セシリアの手にはライフ

ルが握られていた。

「さすがだな、代表候補生。それで、一体誰を狙う気だ」

セシリアは、ライフルをいつでも銃撃ができる姿勢で構えている。それ自体はすばらしいだろう。即座の戦闘にも十分対応できる。

問題は、その銃口の先。それは、千冬へとまっすぐに伸びていた。

「ああ、すみません。敵に対して構える癖がついておりますの」

「それは立派だな。だが、誰を狙っているのか正しく判断できないようでは痛い目を見るぞ」

「ご心配なさらず。わたくしが狙うのは、常に打倒すべき相手だけですわ」

セシリアと千冬は、冷たく笑った。

ヤバイ、空気が重いぞ。まあ、俺が原因なんだろうけどさ。

「次は近接武器だ。やれ」

「わかりましたわ」

ライフルを握る手とは逆の、空いている手。それも光が包んだと思ったら、小型ナイフが現れた。

その瞬間だ。千冬は一步踏み出すと、出席簿をセシリアの喉下に突きつけた。

「っ！」

ライフルの間合いに入られての一振り、セシリアには防ぐことができない。ナイフで防ぐこともかなわず、セシリアは苦悶の声を漏らす。

「先の決闘もそうだったが、懐に入られてからの対応が遅い。そんなことから、力の差がある筈の織斑に一撃を貰ったんだ」

おいおい。ライフルよりは遅いとはいえ、一夏の展開速度よりは十分速いぞ。千冬の近接攻撃に反応できるヤツなんて、国家代表レベルでもないが無理だ。

いつていることは間違っていないが、要求レベルが高すぎる。これは、私が混ざってきているな。もう少し公を心がけるよ。

「ありがとうございます。今の攻撃程度、すぐに防げるように精進

いたしますわ」

そういつて、やはり静かに笑った。ああ、殺伐としてるな。

「おい、美鶴。どうにかしろ」

「なんで？」

「お前のせいだろうが！」

あ、やっぱりわかるか。といつても、俺にもどうしたものか。誰か、正しい対処法を教えてくれよ。

「ふふふ」

こうして、気が休まることなくこの授業は進むのだった。

放課後。体の調子確かめるためのトレーニングも終わり、軽く休息を取った後。やることもなくなつたので、暇つぶしに一夏と箒のトレーニングを覗きに行くことにする。

だがその途中で、目的の人物とは違う、見知った影を見かけた。

「あれは？」

その影を追いかけると、やはりそうだ。

「よう、鈴」

「……美鶴？」

俯いていたその人物が、顔を上げる。どうも心ここにあらずのよううで、俺を認識するまでに時間がかかった。

その人物は、凰鈴音。俺の幼馴染だ。

「ずいぶん暗い顔してるな。どうしたんだよ」

「あんた、変わらないわね。久しぶりに会ったんだから、もう少しということあるでしょう」

呆れたように声を漏らす鈴。似たようなことを、違う幼馴染にいわれた気がする。

「そういう鈴こそ変わらないな。昔のまんまだ」

「どこが？」

「胸と身長」

「死ね」

殺気！？

突然、鈴が殴りかかってきた。憎しみと殺意がこもった、重い拳だ。それを受け止めると、手が痺れた。

「突然なんだ！？　それが久しぶりに再会した愛すべき幼馴染に対する態度か！　それとも、ツインテールだからツンデレに徹しようとしているのか。それとも、現代の若者らしく切れ易いのか。カルシウムを取れ、カルシウムを。そうすれば少しは身長と胸がだな……」

「どれも違うわ。純粹なる殺意よ！」

「落ち着け。世の中には需要と供給というものがあってだな。供給者が入ればそれが必要とする者もいる。つまりだ、貧乳で小さい女の子を愛する大きなお友達もたくさんいる。諦めるな！」

「むしろ諦めたいわ！」

おお、神様。俺の幼馴染は何時、どんな理由からこんなに凶暴になったのでしょうか。

「さつきからよ！」

「ああ。殺気とさつきをかけたのか。なかなか上手いことをいうな」「そんなツマラナイ冗談だったつもりはまったくないわよ！」

「上手いといえば、腹減ったな。何か上手いものでも食に行こうぜ」

「っ！……もういいわ。美鶴と話してもこっちが疲れるだけよ」

「俺は鈴と話すの楽しいけどな」

鈴をからかうのはとても楽しい。

もう一夏のことはどうでもいいや。鈴をかまって遊ぶ……、再会を祝して親交を深めるとしよう。

「食堂行こうぜ。ラーメン食べよう、ラーメン。鈴といえばラーメンだからな」

「はいはい、わかったわよ。あ、それと」

鈴が、何かを思い出したように聞いてきた。

「何だ？」

「一夏と最近親しい女子、いたりしない」

こうして、俺は懐かしい幼馴染と再会した。
一夏よ。お前はその恋愛体質を何とかしろ。

二人の関係（前書き）

今回は少し短くなっております

二人の関係

「というわけでっ！ 織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

クラッカーが乱射され、一夏の頭に紙テープが降り注ぐ。

夕食後の自由時間。場所は寮の食堂だ。

このようなイベントが企画されていたとは露知れず、鈴と夕飯を食べ終え部屋で休んでいたところを連行されたのだ。

「あと、師河ちゃんとセシリアも、すごい試合を見せてくれてありがとう！」

と、俺たちにもクラッカーが鳴らされる。

何とも、微妙な気分だ。女の子に注目されるのは楽しいけどさ。別に祝福されたくて戦ったわけじゃないし、自分たちで戦いたいように戦っただけなのだが。

まあ、女の子にチャホヤされるのはいいことだよな。

「いやー、これでクラス対抗戦も盛り上がるね」

「それに、こんなに強い生徒が二人もいるんだよ。これは全校の注目を集められるよ」

「このクラスになれてよかったよ」

「ほんとほんと」

おかしいな。明らかにクラス以上の人数が集まっている気がする。「ふふ、お互い大変ですわね」

セシリアが二人分のグラスを持って隣に座る。そのうち一つを受け取り、軽くグラスをぶつけ合った。

「いやいや、これは役得さ。俺は一夏のように、この状況を楽しめないバカじゃない」

見ると、一夏も多くの女子に囲まれ疲れた顔をしている。箒はそれに不機嫌そうな顔こしているが、辛く当たるような真似はしていないで、一夏に冷たいものを渡していた。

「あら、わたくしだけでは不満ですよ？」

「それは、セシリアが俺を満足させてくれるかによるな」

その言葉に、セシリアは顔を赤くする。なるほど、こういう攻めには弱いわけか。

「残念だな。俺はセシリアとなら何時でもいいのに」

「わ、わかりましたわ！ 美鶴が望むなら、今夜にでも」

「いや、さすがに今日は無理だろ。アリーナの貸し出し許可も下りないだろうし」

「……アリーナ？」

「だから、また戦おうって話だろ」

「……！！」

途端、言葉の意味がわかったのか真っ赤に顔を染めるセシリア。
ヤバイ、かわいいな。もっといじめたくなる。

「どうした、顔が赤いぞ。まさか、違うことでも考えていたのか？」

「そ、それは、ですね」

「セシリアってさ。思ったよりエロイのな」

そこで、セシリアは撃沈した。机に寝そべるように顔を隠す。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑一夏くん、師河美鶴くんに特別インタビューをしに来ました〜！」

盛り上がる参加者一同。ノリがいいな。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部の副部長やってます。はいこれ名刺」

あ、この名刺名前しかないぞ。これでは電話にメールができないじゃないか。

「ではでは織斑くん！ クラス代表になった感想を、どうぞ！」

「えーと……。まあ、なんというか、がんばります」

適当だな。もう少しやる気だせよ。まるで、望んでクラス代表になったのではないとでも思ったそうじゃないか。

「えー。もっといいコメントちょうだいよ」。俺に触るとヤケドするぜ、とか！」

「自分、不器用ですから」

どっちも前時代的な言葉だな。

「まあ、いいや。適当に捏造しておくからいいとして」

この新聞記者に、報道の正義とはないらしい。まったく、なんといふことだろう。おもしろそうだから是非やってください。

「じゃあ、次は師河くんコメントちょうだい」

「はい、好きなタイプはゴスロリ銀髪赤目の美少女です」

「いや、そんなこと聞いてないんだけど」

「嫌いなタイプはウサ耳です。バニーガールは一族郎党皆殺しにされ全滅してネコ耳メイドが流行ればいいと思います」

「ウサ耳に何の恨みが!？」

色々あるぞ。どこかのバカウサギとかバカウサギとかバカウサギとか。

「あ、嫌いなのは白ウサギなので。黒ウサギは保護します」

「いや、だからそうじゃなくて」

「他に何か聞きたいことでも? あ、初体験の年齢ですか。それはプライベートなことなのでちょっと。ちなみに、一夏はまだチエリです」

「俺を巻き込むな!」

会場が大きく沸いた。筈も小さくだが、拳を握り締め喜んでいるのが見える。

「ああ、もう。私が聞きたいのは二つ。たっちゃんとのこととクラス代表決定戦のことよ!」

はて、たっちゃんとな? 誰だろう、それは?

「南ちゃんと幸せになれるといいと思いますよ」

「そのたっちゃんじゃない! 更識楯無のこと! 少し前、学校中でドンパチやってたでしょう?」

ああ、楯無ね。そういえばやってたっけ。

「更識楯無?」

「誰ですか、それ?」

「ああ、そうか。まだ一年生には馴染みがないのね。この学園の生徒会長で、学園最強を名乗る生徒よ」

「その生徒会長が、美鶴と何か関係があるのか？」

「決闘の一週間くらい前からかな？ 放課後、毎日のように二人が戦っていたのよ」

「どうにも、反応が鈍い。どうも、楯無のことがよくわかっていないらしい。」

「その生徒会長とは、どのような人なのですか？」

「だから、この学園の最強よ。生徒会長つてのは、この学園でもっとも強くないと名乗れないんだけど、たっちゃんはまだ二年生なのにその座にいるの。しかも、IS学園の生徒でありながら自由国籍を持つロシアの国家代表なの」

説明ご苦労様。そこまで聞いて、やっと楯無のすごさがわかったらしい。

「そ、それ本当なんですか！」

「代表候補生じゃなくて、代表！？」

「それって、昔の千冬様と同じじゃない！」

「美鶴、あなたって人は、わたくしの知らない間にどれだけの女生と関係を持っているのですか！」

「だあ、うるさい。少し落ち着け！」

さすがにこの剣幕で詰め寄られるとうるさいので、何とか押しとどめる。

「たっちゃんのことをわかってもらえたところで。聞かせてもらえらる？」

聞かせて、といわれてもな。

「実践は久しぶりだったから、ちょっと鍛錬に付き合ってもらっただけだ」

「あれを鍛錬で片付けていいのかしら……」

「そんなにすごかったんですか？」

「すごかった」

薫子先輩は、一言そういった。

「アリーナやグラウンドじゃなくてさ。上級生の校舎全部が戦場って感じ？ 師河くんはアサルトライフルを容赦なく発砲するし、たっちゃんも鉄扇や格闘技で肉薄する。二人が通り過ぎた後に残るのは、校舎が破壊された跡だけ。一歩間違えば大怪我しそうなのに、二人とも楽しそうに笑ってるんだ。特にたっちゃん。今まで見たことないような、本当に楽しそうな顔で笑うんだ。これはもう、何かあるんじゃないでしょうか」

「……美鶴。俺と箒が剣道場いる間、そんなことしていたのかよ」
「そういえば、山田先生が疲れた顔で、恨みがましく美鶴の顔を見ていたような」

いやあ、反省文なんかで迷惑かけたからな。

「で、どうなんですか、美鶴！ その楯無さんとはどのような関係ですよ！」

肉体関係か？ いや、何度か寝たことはあるけどさ。でもな、別に恋人ってわけじゃないよな。まあ、嫌いじゃないよ。むしろ好きだけどさ。多分、楯無も俺のこと好きだし。互いの家の関係で、付き合うわけには行かないけど。寝たのだって、そういう場面なら色々な監視を誤魔化せるという意味もある。どっちかというと、ビジネスライクな関係だ。

「家同士が古い知り合いなんだよ。まあ、幼馴染みたいなもんだ」
「本当に？」

「さあ？ どう受け取るかはお任せするよ。食材は提供したんだ。料理するのはそっちの役目だろ」

「そういわれたら、こっちも引き下がるしかないか」
そうだろうな。すべてを教えはしないが、嘘も教えない。どういう解釈もでき、だからといって核心を教えてないからこちらに特別被害がない。

楯無との関係がウワサされようが、俺はどうでもいいさ。逆にそっちの方が、裏の繋がりを邪推されなくていいくらいだ。

「では、次の質問です。ISと生身で戦ったらしいけど、本当？」
「本ただけど、それが？」

「それが、で済む問題じゃないでしょ！ただでさえ正気の沙汰とは思えないのに、勝ったんでしょ？信じられないわ」

「別に、軍用じゃなくて試合用だろ？リミッターがかけられてるんだ、別に不可能じゃないさ」

軍用でも関係ないヤツもいるけど。俺の身内とか。

「さすが、たちちゃんと互角に戦うだけあるわね。今年の一年生は、侮れないわね」

と、そこで一通りメモに書き留める黛先輩。

「セシリアちゃんは、何かコメントある？代表候補生がISを装備していない人間に負けたんだけどさ」

「わたくしは死力を尽くして戦い、美鶴はそれに答えただけですわ」
「なるほどね。いいコメントをありがとう」

そこで、黛先輩はカメラを取り出す。

「それじゃ、写真取りましようか。織斑くん、師河くん、セシリアちゃんの三人で並んで」

俺はセシリアに並ぶように立ち上がると、

「セシリア」

「はい？」

セシリアが無防備にこちらを向く。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと・・・2？」

「ぶー、37.5でしたー」

そんなよくわからん合図と共に、フラッシュが光る。

だが、俺はそんなことを気にしない。

「え？」

「はい？」

周りから、間の抜けた参加者の声。いつの間にか、一組の全メンバーが集まっている。その皆が、いつせいに俺とセシリアを見る。

「もう一度、いいでしょうか。その、急なことだったので、実感が持てなくて」

「もちろん、喜んで。だけど」

と、セシリアの手を取る。

「悪いが、ここからは二人の時間ってことで」

セシリアの手を引き、食堂より逃走する。

「え？ あ、あの！」

「あとは頼むぜ、一夏」

「どこ行くんだよ!？」

「決まってるだろ」

二人だけになれる場所だよ。

二人の関係（後書き）

早くシャルとラウラを出したい、色々ネタ満載の短編を書きたいです

ザ・サード（前書き）

どうも、たまに日間ランキングに入ることがあるようです
皆さん、いつも読んでくれてありがとうございます

ザ・サード

「ねえねえ、昨日あの後どうなったの？」

「二人でどこいったの？ 教えてよ」

次の日、俺とセシリアは朝から質問攻めにあっていた。

まあ、昨日のことを考えればしかたないのか。

「それは、その……」

顔を赤くして俯くセシリア。恥ずかしそうに、下半身をむずむずさせている。

「ま、内緒ってことで。こういうのは、二人だけの秘密にしておくからいいんだよ」

「えー。どうしてもダメ？」

「ダメ」

というと、ようやく俺たちは解放された。

まあ、強いていうならば、だ。恥ずかしそうにシートに包まるセシリアはともかわいかった。

「しょうがないな。じゃあさ、この話は知ってる？」

終わったと思ったら、すぐに次の話題だ。女子というものは、よく話題が尽きないものだ。

「中国の代表候補生が、転校してくるんだって」

「転校、ですか？ この時期に」

「今は四月だろ？ なんてこんな中途半端な時期なんだ？」

一夏が会話に混ざってきた。隣には、箒も一緒にいる。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？ 騒ぐことの程でもあるまい。それよりも、今は来月のクラス対抗戦のほうが必要ではないか？」

クラス対抗戦とは、クラス代表同士のリーグマッチだ。一組からの出場者は、もちろん一夏だ。

「そうだぞ。一夏の双肩には、学食デザートの半年フリーパス券が

かかってるんだ。死んでも勝てよ」

「そうだな。どうせやるなら、優勝狙うか。セシリア、悪いけど放課後、練習に付き合ってもらえるか？」

「わたくし、ですか？」

「む。一夏、私では不満なのか？」

不思議そうな顔のセシリアと、不機嫌そうな箒。

「いや、ISの模擬戦を頼めるのはセシリアしかないだろう？」

箒も美鶴も、訓練機を借りるんじゃ時間がかかるし」

「まあ、それはそうだな。セシリアだったら射撃主体の相手との練習になるし、強くなるんだったら格上にボコられるのが一番だろ」

「そうか。そういうことなら、しかたないな。だが、私との剣の練習をサボることは許さんぞ」

「わ、わかってるって」

「ついでだ。」

「俺も少し揉んでやるよ」

「な、美鶴もか!？」

「俺もISの操縦をセシリアに教わろうと思っていたからな。そのついでだ。箒、セシリア、俺。この三人相手にみっちりやれば、まあ優勝できるだろ」

上手い具合に、生かさず殺さず躰けるか。

「織斑くん、がんばってね」

「フリーパスのためにもね!」

無邪気な、クラスメイトの声援がした。これから一夏が見る地獄も知らないで、気楽なもんだ。その地獄を見せるのは俺なんだけど。今のところ、専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから余裕だよ」

「その情報、古いよ」

会話に割り込むように、聞き覚えのある声がした。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、方膝を立ててドアにもたれているのは、鈴だった。
そういえば、一夏に教えるの忘れてたな。

「鈴……？ お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

どこかつかつつけた話し方。すごい似合わない。久しぶりの再会だから、気持ちはこちらからでもないけど。

「おい」

「なによ……っ！？」

鈴が振り返った瞬間、後方へ飛んだ。頭へ振り下ろされた出席簿を避けると、腰を落とし地面を力強く踏み込むと寸勁を撃った。
なるほど。鈴の中国拳法は久しぶりに見るけど、キレが上がってるな。ただ、相手が悪い。

「まさか久しぶりの再会で、いきなりケンカを売られるとは思わなかったぞ」

「え？」

掌打は、出席簿で受け止められる。鈴は恐る恐る顔を挙げ、声の主を確認した。

「ち、千冬さん？」

「織斑先生だ、バカ者」

バシンッ！ と、今度は無事、鈴の頭を捕らえた。

「まったく、お前は私に恨みでもあるのか」

「だ、だって。いきなり後ろから攻撃されるから、つい……。師匠だって『後ろから声をかけてくるような相手は恥ずかしがりなんだ。なら、こっちから積極的に攻めてやるのが紳士の役目さ』っていつてましたよ」

「あいつは、碌なことを教えないな」

「まったくですね。見た目からして信じられませんか」

そう、鈴は場を誤魔化すように笑った。

「笑うな」

バシンッ！　ともう一撃。

「すいません」

「そろそろSHRが始まる。さっさと教室へ戻れ」

「は、はい！　一夏、また後で来るから逃げないでよ！」

鈴は、逃げるように自分の教室へと戻っていった。

「あいつ、何しに来たんだ？」

「それより、鈴がIS操縦者ってことに驚きだ。美鶴は知ってたか？」

「昨日会ったからな」

「なら、昨日教えるよ！」

忘れてたんだよ。

「なあ、一夏、美鶴。今のは誰だ？　知り合いか？」

「まさか、美鶴さんの恋人ではないですわよね？」

「まさか」

あれは、どちらかという手のかかる妹みたいなものだ。箒と同類だ。

「とつとと席に着け。お前たちも、痛い目見たいのか」

そこで、強制的に俺たちの会話は終了した。

まだ納得していないようだ、箒は大人しく席に戻る。

直感的に、自分のライバルだと感じ取ったのかもしれない。

こんな感じで、今日も一日が始まった。

「鈴は幼馴染なんだよ」

昼時の食堂。俺たちが昼飯を食べに来ると、そこには鈴が待ち伏せていた。

「幼馴染は私だろ！」

「箒はファーストだろ。美鶴がセカンド。鈴はサードなんだよ」

鈴は、箒が転校した後に入れ替わる形で転校してきた。箒と面識

がないのはあたりまえだ。

「で、こっちが筈。ほら、前に話しただろ？ 小学校からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

「ふうん、そうなんだ」

鈴は値踏みするように、筈を見た。

「はじめました。あなたとは、色々と気が合いそうだわ」

「ああ、お互いにな」

二人の間に、火花が見えた。お互いが、お互いの事情を正しく認識したのだろう。

「で、そっちの人は？」

「わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットですわ。代表候補生同士、互いに国の名に恥じない行為をいたしましょう」

「ちなみに、俺の彼女」

「ぶはっ！？」

水を飲んでいた鈴が、勢いよく噴出した。

「汚いぞ、鈴」

「か、彼女！ 美鶴の！？」

俺の文句を無視して、鈴が詰め寄ってくる。

「千冬さん以外に、あんたの恋人になるような変わり者がいたの！？」

「おい、さり気に千冬姉を恋人呼ばわりするなよ」

「なんだか、侮辱された気がしますわ」

セシリアと一夏は、眉をひそめて鈴を見る。

「あ、ごめん。悪気があるわけじゃないの。でもさ、美鶴の恋人だよ。徹底的な肉食主義で高級嗜好。女好きの癖に、好みにうるさい美鶴だよ」

うん、正しい評価だな。さすが幼馴染。

俺は女の子にちよっかいをかけるが、本気で好きになるのはそれほど多くないからな。

「そんな美鶴が、自分から恋人だなんて。つまり、そのレベルなの

ね」

はあ、と深いため息を吐く鈴。

「一夏、なんでクラス代表なんてやってるのよ。今すぐ交代したほうがいいんじゃない？ 今の一夏じゃ、セシリアに手も足もでないでしょ」

「俺だって、そうしたいんだよ……。でも、もう決まったんだよ」
疲れたようにいう一夏。はは、何が不満なのだろうな。

「一夏、なにを弱気になっっているんだ。男が最初からそんな態度でどうする。鳳、だったな。お前も、一夏を舐めなくてもらおうか」
「舐める？ バカにしないでくれる」

一夏をかばう筈に、心外だというような鈴。

「私は、どんな相手でも舐めはしないわ。それが、誰だってね」
その眼は今までとはちがい、刃物のように鋭い。しん、と場が静まり返る。

「ま、そういうことだ。今度のクラス対抗戦、楽しくなりそうだな」
「そうだな。鳳、非礼を詫びる。すまなかった」

「いいわよ。あと、鈴でいいわ。私も箒って呼ぶから」

このような、さばさばした性格は鈴の美点だ。見ている分には、なかなか気持ちがいい。

「そうだ、私が一夏にISのこと教えようか？ 舐めはしないけど、手応えがないのもつまらないし」

「いいのか？ あ、でも美鶴や箒に教えてもらうことになってるんだ」

申し訳なさそうに、一夏はいう。

「そうなの？ で、でもさ！ ISに乗り始めて間もない美鶴や箒より、代表候補生の私が教えたほうがいいんじゃない」

鈴は、一夏に詰め寄るようとそういった。

「ねっ？ 美鶴もそう思うでしょ！」

いつてことは正論だな。それに異論はない。あるとすれば、
「私は、いいと思うぞ」

「箒？」

「うん、私よりも鈴のほうが適任かもしれないな」

そう、箒は笑った。

おいおい、何いってんだよ。

「いいのか？」

「ああ。それに、そのほうが美鶴もセシリアとの訓練に集中できるんじゃないか？」

なんだろう。今の箒は、何か気に入らない。

入学式の日の夜もそうだったが、あの時とはまた違う感じだ。

「わかった。だけど、鈴一人だと負担があるだろ。俺たちに鈴も入れて合同訓練にする。そのほうが、互いのためにもなるだろう」

一人でやるよりも、複数で訓練をするほうが効率的だ。自分の得手不得手によって教えることや教えられることがある。模擬戦や多人数戦闘の訓練もできる。

というのが、表向きの理由だ。

「……それでいいわ。けど、私は主に一夏につくわよ」

「それは時と場合による」

鈴は不満そうに顔を歪めた。

「そういえば、鈴。今、実家の中華屋はどうなってるんだ」

一夏が、雰囲気を変えるように話題を変えた。

「実家がお店なのですか？」

「そうだ。昔はよく二人で食べにいったな」

「ああ。今、親父さんは元気にしてるのか？ まあ、あの人こそ病気と無縁だよな」

「あ、うん。元気だったよ。だけど、少し老けたかな」
なんだ、妙な違和感を感じる。

「それより、放課後って時間ある？ 久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あそこって、去年潰れなかったか」

「じゃあ、学食はでもいいから。積もる話もあるでしょ」

ないだろ。一夏はこの一年は受験勉強だし、鈴もISの訓練ばかりだったはずだ。つまりは、一夏と一緒にいたための方便だろう。「いいけど、さ」

一夏は、こちらを伺うように見た。

「……一夏の、好きにすればいい。一日くらいは、特訓を休みにしてもいいだろう」

篤が、そう答えた。それは、どこかきこちなく無理をしているように見える。

「いいのか？」

「私はかまわない」

「まあ、篤がいいなら、俺もいいけど」

「わたくしも、いいですわ」

「そういうわけだ。だが、明日からはみっちりと扱いてやるからな」

「ああ、わかってるよ。なら、せっかくだし学外に行くか」

「うん。じゃあ、放課後迎えに行くね」

鈴は嬉しそうに笑うと、ラーメンのスープを飲み干し片付けに行った。

「そうだ。せっかうだしみんなで行かないか？」

一夏が提案した。案の定、一夏は鈴の意図に気づいていないようだ。

「悪いけど、パスだ。訓練機の予約してあるし、俺は訓練する」

「私も同じだ。私たちのことは気にしないで、存分に楽しんでくるといい」

「そうか？ 悪いな」

そして放課後、一夏は鈴を連れ立って教室を後にした。

その二人を辛そう笑いに見送る篤が、やけに気になった。

ザ・サード（後書き）

算の脆さを上手く書きたいと思います

ファースト対セカンド（前書き）

なかなか話が進まないです

ファースト対セカンド

イメージするのは、ISを動かすことじゃない。ISが、自分の体の一部だと思うこと。

この全身を覆う装甲は、装甲ではない。自分の体の延長だ。

腕も、足も、指の先までもがすべて自分の体。

ならば、後は何時もと同じだ。銃を抜き、目標を定め、引き金を引く。

「……ダメだな」

一連の動作の後、結果を確認する。

ダメだ、狙いよりも三十センチ程ずれている。

「武装の展開速度も一秒つてところか。まだ遅いな」

「それでもありませんわ。訓練を初めて一時間でここまでできれば十分ですわ」

「本当に、お前は規格外だな」

「でも、なんか上手いかないんだよな。どうも、俺のISの間になにか挟まっているような、そんな感覚がする」

俺、セシリア、箒の三人は、アリーナで訓練を行っていた。使う機体は、ラファール・リバイヴだ。射撃武器をメインとする俺には、箒の使う打鉄よりも好みだ。

「適正が低いからか？」

「美鶴は、どれくらいなんだ？」

「Cだよ」

ちなみに、これはISの適正がS、A、B、Cの四段階しかないためにCとなっているだけ。実際は、今年の一年の中でもトップクラスに悪いらしい。そのせいか、どうもISが思うように動いてくれない。

「ま、初日はこんなもんか。じっくり行けさ」

「そうですね。どんな武器でもそうですね、訓練時間と実力は

比列しますわ。最初から完璧にできると思っほうが間違いです」

「だからこそ、毎日の研鑽が重要なわけだ」

と、三人が各々納得をした。

「じゃあ、最後の締め模擬戦でもやるか。箒、相手してくれよ」

「わ、私が!？」

なんだ、その驚きようは。

「相手なら、セシリアに頼めばいいだろう」

「ヤダよ。今の俺じゃ手も足も出ないだろう。箒は俺と戦いたくないのか？」

「……戦いたい。私の強さを、美鶴に見せ付けたい。私は強くなければならないから」

その言葉が、引かかった。やはり、今日の箒はおかしい。

「では、わたくしが審判を勤めます」

「ああ、頼む」

ならば、戦いの中で確かめるしかないな。

「箒、全力でこい」

「もちろんだ」

俺は五五口径アサルトライフル・ヴェントを、箒は近接用ブレードを構えた。

「それでは、始め!」

俺はアサルトライフルを構えると、箒にフルオートで放つ。それを、箒は上空に逃げることで回避した。

ダメだ、狙いが甘い。ハイパーセンサーから送られてくる情報と、自分の意識がかみ合わない感じた。ゴーグルとスコップを接続した感じと似ているが、あれはライフルを構える手間を無くすための処理だ。相手の位置情報やターゲットサイトなど、余計なものが多すぎる。銃撃の後の反動がないのも落ち着かない。

「はあ!」

気合と共に、箒が間合いに飛び込んできた。アサルトライフルで近接ブレードを受け流すと、ストック部分で殴りつける。

「つち！」

動作が遅い。箒は軽く後ろに避けるだけで、俺の攻撃は空を斬る。どうにも、ISの操縦では箒に分がありそうだ。

離れた箒に、再び銃撃。だが、結果は同じだ。訓練の時と実際に戦うのでは、やはりこれほどまで違う。

「なら、ちよつと弄るか」

ISの設定を変更。ハイパー・リンクを切断。これで余計なものはなくなった。

箒の動きに合わせ、目測で銃を撃つ。

「さつきよりも狙いが鋭い!？」

うん、まあまあだな。だいぶ何時もの感覚に近くなった。それでもまだハイパーセンサーは有効だから、気分としてはドーピングモードに近い。

箒が加速し、銃撃を掻い潜る。俺はそれに合わせアサルトライフルから、近接ナイフを展開する。イメージは、腰のホルスターから逆手で抜く感じだ。

「なるほど、いい剣戟だ。成長したな、箒」

「お前に褒められるとは、私も捨てたものではないな」

ナイフとブレードを打ち合う。接近戦では箒に敵わず、俺は防御に徹する。

「なあ、箒」

「今は試合中だぞ。話は後にしてくれ」

「今だから、こそだ。戦いの中だからこそ、聞けることもある。」

「最近、なんか様子が変わったな」

「そうか？」

「前よりもずっと落ち着いてる。癪癪起こして一夏に当たることもなくなったし、入学式の夜が嘘のようだ」

「私も、お前たちに負けてられないからな。過去から逃げずに、戦うことにしたんだ」

そこに、箒のどんな思いが込められているかはわからない。俺は

箒のすべてを知っている訳ではないし、これからも知ることはないだろう。

俺は、箒ではないのだから。

それでも、わかることはある。

「なんか、無理してない？」

「なに？」

箒の攻撃が、一瞬緩まった。俺は間髪入れず、攻めに転じる。

「な、卑怯だぞ！」

「いいから聞けよ。今日、鈴と一夏が遊びに行くこと許可しただろ」

「それがどうした。別に久しぶりに再会した幼馴染と話すことも許さないほど、私の見方は狭くない」

「けど、辛そうな顔してたぞ。鈴も一夏のことを好きってわかったんだろ？」

「それがなんだ！ 私が一夏と鈴が会話するのを邪魔し、それでどうなる。それが、戦いなのか。それが強さなのか！」

箒の剣がぶれる。力任せの大降り。やり場のない思いを、剣に乗せているような攻撃だ。

これが、箒の本質。

方向性は変わっても、強さを求めるといふ弱さは変わっていない。別に、それは悪いことじゃない。自分が弱いからこそ、強くなるうとすることは悪くない。

実際、最近の箒は戦士としての道を歩き出していた。

だが、速すぎたのだ。

自分の体力も考えず、ペース配分も気にしないで、足元も見ずにただ駆け抜けた。今まではよかった。一夏に声をかける女子は多くいたが、それは本気の好意ではない。言い方は悪いが、興味本位。その程度なら、箒は苦ともしない。

だが、そこに鈴が現れた。自分にも負けなほど、一夏を好きでいる。突然現れた、明確な傷害だ。その現れた障害に、足を取られた。

倒れて傷を負ったのにも気づかずに、無理にまた走ろうとした。

その結果が、これだ。フォームもガタガタ。走るのも精一杯なのに、止まることをしない。止まることを考えてもいない。余計、自分を追い込んでいるとも知らずに。

「お前は、昔から自分を追い込みすぎなんだよ。意固地になって、すべて自分で押さえ込む。だから」

箒の懐に入り込み、ナイフを振るう。シールドエネルギーを削り、そのまま回し蹴りを放つ。

「もつと我俥になれよ」

「私に、私にまた醜態を晒せというのか！ 感情のまま、一夏に当たれというのか！」

「違う！ 感情のままに戦えばいいんだよ。もともと、戦いつてのは自分の我俥でやるもんだ。俺は千冬を愛してるから戦うし、セシリアも大好きだから戦う。二股上等！ どっちも欲しいんだからしようがないだろ！ お前も鈴に譲るな！ 自分を蔑むな！ それは戦いじゃない、逃げだ！ 一夏が欲しいなら戦え！ 自分の我俥で自分の好きなように、自分の思うがままに戦え！」

箒のブレードを避けると、握っている手をナイフで弾いた。ブレードが宙を舞う。

「それが、戦士だ！」

そして、箒を殴った。思いっきり、全力で、一切の手加減なく殴った。

「……ずいぶん、好き勝手いつてくれるな」

箒が、ライフルを出した。俺は反射的に一步下がると、そこに銃撃が降り注ぐ。

「幼馴染かもしれない。年上かもしれない。だが、たったそれだけでずいぶんないようだ。お前は神かなにかのつもりか！ 私はな、お前のそういうところが昔から気に食わないんだよ！」

箒が、叫んだ。

「ああ、そうさ。私は怖かったんだよ。鈴と一夏が楽しそうにして

いるのを見て、それが気に食わなくて。だけどそれを認めたらまた昔の私に戻りそう。だが、それが悪いのか！」

命中も満足に定まらず、闇雲に撃つだけの銃弾。箒は刀が本来得意とする武器なので、それも当たり前だ。だが、それは先ほどまでの剣筋よりも、俺を魅せた。

「私は、私が嫌いなんだよ！ 剣道だって、ただの憂さ晴らしでやっていた。すぐに暴力に走る。そんなこと、私が一番知っている！ だが、そんなことをお前にいわれたくない！」

箒が走る。地に刺さっていたブレードを抜くと、そのまま俺に斬りかかった。

「ああ、いいさ。そこまでいうのなら戦ってやる。まずは、あの横槍中国娘を倒す。そして、鈍感バ力な一夏を私のものにする！ 邪魔するやつは切伏せる！ そして」

箒の太刀を、ナイフで受け止める。その攻撃は重く、俺は弾き飛ばされてしまう。

「まずは、何でも知ったような口を利く戦闘バ力を地面に這い蹲らせる。文句があるか！」

箒の目は、真っ直ぐと俺を見ていた。熱い熱を持ち、それでも怒りに囚われず打倒するべき相手だけを見ている。

ああ、いい眼だ。くそ、一夏には勿体無く思えてきたぜ。

「ああ、文句なんてないさ。むしろ上等だ。いいぜ、箒。さあ、存分に戦おう。苦痛も、悩みも、迷いも、戦うことで乗り越えろ！」

箒がブレードを振りかぶり突撃する。俺はアサルトライフルを展開し、それを迎え撃つ。

「来いよ、箒！」

「墜ちろ、美鶴！」

そして、

「はっ、やるじゃねえか！」

「私を、舐めるなよ」

コンマ数秒の差で、箒のブレードが銃弾より先に俺を捕らえた。

「勝者、篠ノ之箒」

セシリアの声が響く。俺はISを解除すると、その場に座り込んだ。

「ああ、クソ！ 負けたのは久しぶりだ。かつこ悪い！」

敗北は何時以来だろうか。確か、一年ぶりくらいか？

セシリアが、俺たち二人に近づいてきた。

「でも、美鶴はまだISに乗り始めたばかりですし。適正のことも

……」

「関係ねえよ。負けは負けだ。いいか、次は負けないからな、箒！」

「ああ、そうだな。私も、もっと美鶴とは戦いたい」

そう笑う箒の顔は、今まで以上にすがすがしく輝いていたと思う。その顔を見たら、たまには負けるのも悪くないと思ってしまった。

ちなみにその後、生身で木刀とナイフで戦いボコボコにしてやった。

俺は負けっぱなしは嫌いなんだよ。

ファースト対セカンド（後書き）

三巻まで書けば一区切り付く予定です。その前に一巻と番外編を数話書くことを目標とします

弱さと強さ（前書き）

鈴を美鶴のヒロインにすればと少し後悔
でも多すぎると書ききれなくなるからいいか

弱さと強さ

「やはり、労働後の一杯は格別だな」

中年親父のような一言をいうのは、千冬だ。俺の部屋に勝手に訪れ、机とソファを占領して自前の酒で晩酌をしている。

「生徒の部屋で酒を飲むなよ。それに、寮長が酔っ払ってもしなにか起きたらどうするんだ」

「今はプライベートだ。それに私はこれくらいで酔うほど弱くはない。もしもという事態も、そう簡単には起こらないからもしもというんだ」

と、ビールを飲み干す。実に美味そうだ。あんな苦いもののが美味しいのか、まったく謎だけだな。

「はいはい。まったく、急に来るから大したツマミはないぞ」

冷蔵庫にあつたもので、簡単な炒め物を作り千冬へと出す。

「なに、これだけあれば十分だ。お前も飲むか？」

「生徒に酒を勧めるなよ。あと、ビールは苦いから嫌いだ」

「お子様め。まあ、飲み物でも用意して座れ」

まるで自分の部屋のように振舞う千冬。まあ、いいけどさ。

俺は自分のコーラを準備すると、千冬の隣へと腰掛けた。

千冬は、俺や一夏の前ではこのようにだらしがない。なので、俺もセシリアと接する時より、千冬への態度は適当だ。別に、これに文句があるわけじゃない。セシリアとは違う、千冬との距離感。これ

が、俺と千冬のいつもなのだ。

「美鶴、聞いたぞ」

「何が？」

「篠ノ之に負けたりしないな。私以外に負けるとは何事だ」

どこから聞きつけてきたのか。耳が速いやツだ。

「うるさい。その後、ちゃんと礼はしたさ」

「何だ、言い訳はしないのか？ オルコットの時のように生身でライフルを使つてれば勝てた、とか。つまらないな、せっかく慰めてやろうと思つたのに。膝を貸してやろうか」

「俺は小さなガキか！」

「なんだ、昔はよく慰めてやってただろ。負けるたびに、私のところにグチをいいに来ていたのを忘れたか？」

そんな小学生の頃の話を持ち出しやがって。そういう恥ずかしい話は忘れてくれよ。

「それに、私から見ればまだまだまだガキさ」

酒を飲んでいるためか、饒舌になる千冬。

「大体、お前は普段から格好をつけすぎだ。なんだ、あのオルコットに対する態度は」

「好きな女にはいいところを見せたいもんだ」

「ほう。私はお前のいいところなんて見たことないがな」

と、千冬は面白そうに笑った。

「俺も、千冬のかっこいいところなんて見たことなかったぞ。なんだ、昼間の猫かぶりは。年下の女性とにチャホヤされていい気になってるんじゃないのか」

「あれは、教師として当然の態度を取っているだけだ」

癪に障ったのか、頬を思いっきり抓られる。

「バカ、やめろ千冬！」

「断る。浮気を黙認してやってるんだ。これくらいの憂さ晴らしはさせろ」

ああ、くそ。なんていい顔をしゃがる。かわいいじゃないか！

「ん？ どうした」

「いや、惚れた弱みというか。俺って本当に千冬を愛してるんだなと思ってさ」

「そうだろそうだろ。私も美鶴を愛してるぞ。だから、私に感謝してその頬を差し出せ」

こんな風に、俺と千冬は楽しい一時を過ごしていた。だが、ドゴン！

突如、廊下より何かが破壊されるような大きな音が聞こえた。

「おい、千冬」

「なんだ？」

「もしも、が起こったらしいぞ」

「そのようだな」

千冬は大きいため息を吐くと、目付きを変えた。プライベートか

ら、教師のものになったのだ。

「師河、見に行くぞ。お前もついて来い」

「了解ですよ、織斑先生」

俺と千冬は連れ立って、廊下へと出た。幸い、物音がしたほうに生徒は集まっているようで、二人で同じ部屋から出たのは見られなかった。

「何ごとだ」

「織斑先生、篠ノ之さんと鳳さんが」

箒と鈴がどうかしたか？

群集の中を、騒動の中心へと進むと、台風の目のように空けた空間へ出た。そこは、一夏と箒の部屋の前。見ると、部屋の扉が破壊されている。さっきの音はそれが原因だろう。そして、

「はあ!!」

「セイヤ!」

木刀を持った箒と、二本の青龍刀を持った鈴が激しい死闘を演じていた。

「おい、二人ともやめろ!」

一夏が、懸命に戦いを止めようとしていたが、それも無駄。二人は、戦うことをやめない。剣と剣が激しくぶつかり合う。

「そこだ!」

「甘いわ!」

箒が右肩から斜め方向に斬り付けると、鈴は小柄な体系を生かしそれを避ける。と思った瞬間、一瞬で最高速度まで達し、地を這うように箒の懷に潜ると、全身をバネのようにして顎を蹴り上げる。

「なっ！？ 速い！」

「師匠から学んだのよ」

その動きは、鈴の師匠に比べるとまだまだ甘い、それでも箒には十分なようで、転ぶように避けた箒の肩を蹴り抜いた。

「あれって、一応暗殺術か何かのはずなんだけどだ」

「どいつもこいつも、私の知人にはマトモなヤツはいないのか」

あのバカウサギの親友が何をいつている。大体、千冬だってお世辞にもマトモとはいえないだろう。

「くっ！」

箒も負けてはいない。倒れながらも、空中で自由に動けない鈴に木刀を振るう。出鱈目な体勢から振るわれた力任せな一撃だが体格で劣る鈴には十分なようで、木刀を防いだ左腕を損傷させた。折れてはいないだろうが、しばらくは痺れて動かせないだろう。

「やるわね」

「お前もな。……お互い、腕一本か」

「ええ。そろそろ、決着をつけましょうか」

そう、二人が必殺の構えを取る。次の一撃で、勝負を決めるつもりだろう。観客が、固唾を吞んでこの顛末を見守る。

刹那の時間が流れた。そだが、それは永遠とさえ思える。

「はっ！」

「セイツ！」

二人が、同時に踏み込んだ。リーチと力は箒。だが速さと手数では鈴が勝っている。単純な戦闘力も鈴が上。箒は、何とか気迫で喰らい付いている様子だ。

そして、

「いい加減にしろ！」

「ぐはっ！？」「

千冬の拳骨が、二人に同時に落とされた。結果、両者同時ノックダウン。千冬の一人勝ちつてところだ。

「何するんですか、織斑先生！」

「今大事な勝負の最中だったんですよ！」

「黙れ」

ともう一発。

「話は寮長室で聞く。ついて来い。他のものは部屋に戻って宿題でもしてろ」

群集を一声で散らすと、鈴と箒の首下をネコのようにつまみ引きずってゆく。

「織斑、お前も来い」

「俺も！？」「

「重要参考人だ」

有無をいわせない千冬。

俺も、その後に続く。

寮長室につくと、千冬は簾と鈴を正座させた。一夏はその後ろで
気まずそうに立っている。俺は、壁に背を預けことの成り行きを見
守ることにした。

「思ったより、きれいだな。千冬姉のことだから、もっと汚いかと
思った」

「織斑先生だ。お前も正座するか」
「す、すみません！」

ちなみに、きれいなのは俺が掃除と洗濯をたまにしているからだ。
いい年なんだから、せめて自分の下着くらい自分で洗えよ。

「で、あの騒ぎの理由は何だ」

「えっと……」

「それは……」

二人がいいにくそうにうつむいた。

「織斑、説明しろ」

「わかりました」

と一夏が少しずつ、状況を説明しだした。

なんでも、食後に部屋でゆっくりしていたら鈴が訪ねてきたらし
い。曰く、簾も男と同じ部屋だとゆっくりできないだろうから私が
一夏と同じ部屋になる。今すぐ出て行け。

それに、簾は一言。嫌だ、と答えた。

後はなし崩しの口論となり、気づけば一夏との同室を賭けて決
闘が始まったらしい。

「……アホか、お前たち。一度決まった部屋がそう簡単に変えられるか」

その話を聞いた千冬は、そう切り捨てた。

「まったく。織斑、この話を聞いてどう思う？」

「どう、ですか？」

「なぜ、二人はお前と一緒にの部屋になりたがったんだと思う？ それも、決闘までしてだ」

「だから、鈴は箒に気を使っただろう？ 箒は人見知りだから、俺と同じ部屋がいいってことじゃないのか？」

「お前は、そんなことであんな事態になると本気で思っているのか」「それ以外になにか理由があるのか？」

それは、本気でいっている眼だった。こいつは真性のバカだ。

「もういい。鳳、篠ノ之。お前たちはなにか言い分はあるか」

「あの、本当に部屋変えは無理なんですか？」

「無理だ。それに意味がない。月末にも新たな部屋が準備できる。そうしたら、織斑は師河と同じ部屋だ」

「嫌です！」

「……なぜお前が反応する」

力強く言い放つ俺に、千冬がジト目を向けてきた。

「だって、部屋に女の子を呼べないじゃないですか！」

「俺は別にいいぞ。友達呼ぶくらい、俺もするからな」

「いや、だって。一夏も、自分の姉と友達がセックスするの見たくないだろ？」

「黙れ！」

千冬の怒声と出席簿が飛んできた。俺はそれを首を傾げるだけでそれを避ける。

「危ないな」

「なにをいつてるんだ！」

「まあ、そういうことだ。あ、セシリアの時もあるぞ」

「いい、いうな。わかったから」

顔を真っ赤にする一夏。篝も鈴も似たような感じだ。

「わかった。お前は必ず一夏と同じ部屋にする。いいな！」

おい、苗字から名前になってるぞ。これだけ慌てる千冬を見るのはめずらしい。おそらく、酔いの影響もあるのだろう。それとも、さすがに弟の前でそういう話をされると恥ずかしいのだろうか。

「というわけだ。篠ノ之、鳳。ここで反省文を書いていけ」

「えー」

「いいな」

「「わかりました！」」

いそいそと筆記用具片手に、反省文を書き始める二人。俺と一夏はもう用もないだろうと、自分の部屋へと戻る。

「あ、そうだ。一夏、約束覚えてる？」

「約束？」

鈴に背後より引き止められた。

「約束っていうと、あれか」

「覚えてる！」

「鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を」

「そ、そうっ。それ！」

こいつ。俺が知らん間にそんな約束をしていたのか。鈴もなかなかやるな。

「おごつてくれるってやつか？」

「……はい？」

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺にメシをごちそうしてくれるって約束だろ？」

場が静まり返る。

うそだろ？ 鈍い鈍いと思っていたが、これは救いようがない。

場の空気も読まず、一夏は一人自慢気に語る。

「いやしかし、俺は自分の記憶力に感心……」

バアンッ！

鈴が、一夏の頬を引つ叩いた。怒りに満ちた眼差しには涙が浮かび、それがこぼれないように唇を硬く結び堪えている。

今の鈴の気持ちは、どれほどのものだろうか。鈴は、あの言葉をいうためにどれほどの勇気を振り絞っただろうか。あの、プロポーズの言葉を。いや、そこまでいなくてもだ。自分の好きという想いを込めた言葉だ。そして、一夏が了承した時、どれほど嬉しかっただろうか。

だが、その想いはすべて幻想となったのだ。幻のように、すべて消えた。

「あ、あの、だな、鈴……」

「最つつつ低！ 女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ！ 犬に噛まれて死ね！」

鈴は逃げるように、寮長室を出て行く。

「……まずい。完全に怒らせた」

「一夏」

「なんだ、箒？」

「馬に蹴られて死ね！」

と一言。その後、箒も寮長室を出て行った。

「えっと、反省文はいいのかな？」

「構わん。その代わり、織斑。今夜は廊下で一晩中正座をしている」

「なんで!？」

「やれ」

有無をいわせぬ千冬。見るからに怒り心頭だ。

「美鶴！」

助けを求めるようにこちらを見る一夏。

「じゃあ、俺は寝るわ。せいぜい背中からさされないようにしろよ、大馬鹿鹿野郎」

もちろん、俺も助けるつもりなどない。

俺も寮長室を後にすると、自分の部屋に戻る。

鈴を追うことはしない。俺が追っても、どうしようもないからだ。俺が追って、なんて言葉をかければいい。優しい慰めでもいいのか。バカらしい。

鈴はそこまで弱くない。

それに、箒もいる。鈴と同じ、一夏を好きな箒がいる。なにがどうなるかはわからない。でも、箒なら大丈夫だろう。

俺はそう、確信していた。

「鈴」

「……何よ、笑いに來たの」

箒が鈴を見つけた場所は、寮の外。芝生が生い茂る中にはだった。そこに置かれたベンチ。闇夜で顔はよく見えないが、それでも泣いていることは確かだろう。

「ああ、そうかもな」

と箒はいう。

「なんですって？」

鈴は顔を挙げ、赤く充血しているであろう目で箒をにらんだ。箒はそれを無理すると、鈴に向かい手に持っていたものを投げる。

「な、なに？　これ、あたしの訓練用の剣」

それは、廊下で鈴が使っていた二本の青龍刀だ。ここに来る前に、廊下に自分の木刀と共に置き去りにされていたものを持ってきたのだ。

「構えろ。勝負はまだついていない」

「もう、意味ないわ。聞いたでしょ。部屋割りはまだ決まってるし。それに、一夏は私のことを何とも思っていない。あの日からの私の想いは、一夏と結婚するっていう未来は消えたのよ！」

そう、鈴は言い捨てた。自分の想いを、すべて消し去るように。そんな鈴に、箒は木刀を構え振り下ろす。その太刀筋には、一切の躊躇いはない。

「なにをするのよ！」

鈴はかろうじて青龍刀で受けると、威力を殺すようにベンチより跳んだ。

「部屋を奪おうとしたあたしへの腹いせ！　それとも、単に私が邪魔だっていうの！」

「鈴」

声に悲しみを混ぜながら、鈴は叫ぶ。それに、箒は静かに名前を呼んだ。

「鈴、お前は強い」

「え？」

「お前は強い。私よりも、ずっとだ。今日、久しぶりに一夏と会っ

たというのに、その行動には一切の躊躇いもなく、自分の想いを一夏にぶつけていった。私など、その勇気がなくて一夏に声をかけるのが精一杯。満足に話すこともできなかった」

箒は木刀を腰打めに構えると、鈴へと一足で迫る。その勢いのまま、鈴へと木刀を振り上げた。

「わかるか、私の気持ちだ。私の苦悩だ。お前という敵を前にして、私は戦おうとした。だが、満足に戦うこともできずに、気がついたら逃げていたんだ」

なおも、箒の攻撃は続く。鈴は、防戦一方だ。

「そして、やっと戦おうと思った矢先になんだ。約束だと、プロポーズだと！ 想いを満足に告げることもできない私に対して、なんだそれは。お前は、一体どれだけ私の先を進んでいるんだ！」

鈴の足を払いバランスを崩すと、そのまま懷に飛び込み片手で鈴を掴む。

「私は、お前という敵の強大さを改めてしつた。それでこそ、挑む価値があるというものだ。なのに！」

そして、鈴を地面へと押し付けるように叩きつけた。剣術ではない、古武術の技だ。

「お前はそうやって逃げて、勝手に負けて。ふざけるな！ 私はまだお前と戦ってすらいないんだ！ それを負け逃げだと。そんなこと、許すわけがないだろう！」

箒は叫んだ。地面へと鈴を組み伏せ、襟を掴み頭を持ち上げる。そして、真っ直ぐに見つめて叫んだ。

「いいか。私は一夏が好きだ。大好きだ！ だから、一夏を私のものにする。邪魔するものは正面より斬り捨てる。お前はどんなんだ、鈴！」

「……わよ」

鈴が、小さく何かをいった。

「なんだ？」

「調子に乗ってるんじゃないわよ！」

鈴は掌をもう一方の掌に重ねると、箒の胴を打ち抜いた。単把という技だ。

体勢を崩す箒より、軽業師のように抜け出しと青龍刀を構えなおす鈴。箒も同じく立ち上がると、鈴と対峙した。

「私が、一夏をどう思ってるかって？ 好きよ、好きに決まってるでしょ！ あの無自覚で女を惚れさせて、そのくせ自分は超が百個つくほどの鈍感で。お人よしでヘタレで、でも時々すごく熱くてかっこよくて。とにかく、私は一夏が大好きなのよ！」

鈴の想いが響き渡る。それは心からの叫びだ。

「大体、私はあんたが気に食わないのよ。今日、校外に出た時だつて出る話題はあんたと美鶴のことばかり。美鶴はまだいいわ。でも、あんたは許さない。一夏の隣にいる幼馴染は私なのよ。何がファーストよ。ちよつと会うのが早かっただけでしょ。過ごした期間なら私の方が長いのよ！ 本当に、気に入らない！」

「なら、どうする」

「決まってるでしょ。私の想いを踏みにじった一夏を潰す。その後、改めて私の想いをぶつける。今度は勘違いの仕様がなくらい、余すことなく伝える。そしてなによりまずは」

青龍刀の刃を、箒へと向けた。

「箒、あんたを潰す。私は千冬さんみたいに、好きな男が他の女になびくのを我慢できるほど人間で来ていないの。一夫多妻制？ 英雄色を好む？ 知ったことじゃないわ。一夏の隣にいるのは私一人で十分。千冬さんでも美鶴でも、ましてや箒でもない。私だけよ！」
「なら、することは一つだ」
「ええ、もう決まってるわ」

一瞬の沈黙。そして、

「戦おう！」

「戦うわよ！」

二人の女が、互いの想いを懸けて火花を散らした。

弱さと強さ（後書き）

一巻が終わったら短編を少しやります
多分おそらくメイビ―

それぞれの戦場（前書き）

第の人気の無さに絶望した

それぞれの戦場

あれから数週間、すでに五月だ。

あの日から、一夏と鈴はケンカをしたまま。そして、箒は鈴に付いたようだ。

俺はというと、一夏に怒りを覚えたものの、それでもどうにか約束の内容を思い出そうという姿勢に、まあそれなりに許してはいた。訂正だ。許す、許さないの権限は俺にはない。それは鈴が決めることだ。

「一夏、ちょっといい」

そんなある日。鈴のほうから、一夏に声をかけてきた。箒も一緒だ。二人の態度は、どうみても穏やかではない。

俺は席を外そうと立ち上がり、

「いいわ。美鶴も聞きなさい」

「いいのか？」

「ええ」

その言葉に、再び席に着く。

一体、どういっつもりだ？

「一夏。クラス対抗戦の日程表は見た？」

「ああ。一回戦で当たるな」

「そうね。そこで、私はアンタを完膚なきまでに潰す。私は、アンタに怒ってるの。だから、そのケリを付けさせてもらっわ。その後、もう一度だけ、私の言葉を伝える。つまり」

鈴は獲物を見つけた猫のように笑う。

「宣戦布告よ」

なるほど、ね。それが鈴の答えか。

「なあ、鈴」

「何よ？」

「俺、そんなに怒られるようなことしたのか？ あれからずっと考
えてるんだけど、さっぱりわからないんだ。俺に原因があるなら謝
りたい。だから、教えてくれないか」

「嫌よ」

一夏の懇願を、鈴は即答で断る。

「考えてもわからないのは当たり前よ。一夏はそういう人間だから。
もうこれは変えようのない性格。どうしようもなく優しくて、残酷
な性質なの。でも、教えない。教えたら、私は負けることになるか
ら。だから、アンタを一度潰して、それから思い知らせる。教える
んじゃないわ、思い知らせるのよ」

「それで、箒はどうするんだ」

静観していた俺は、同じく静観していた箒に聞く。

「私は、鈴に付く。そして勝っても負けても、鈴と同時に始めるつ
もりだ」

「なるほど」

「始めるってなにをだよ？」

決まってるだろ。鈴と箒の、果てしない戦いだよ。一夏に勝った

ら、負けないように戦い続ける。負けたら、勝てるように戦い続ける。

恋愛という、終わりのない戦いだ。

「そういうこと。でも、一夏。私だけが一方的に条件を出すだけじゃフェアじゃないわ。もし私が負けるようなことがあったら、アンタのいうことを一つ聞いてあげる。つまり、これは賭けよ」

「なんでも、か？」

「ええ、なんでもよ」

そこで一夏は、何かを考えるような素振りを見せて、

「なら、謝らせてくれ。怒っている理由は教えなくていい。俺に原因があるというなら、俺が答えを出さないといけない。だけど、それまで鈴や箒と険悪な関係が続くのは嫌なんだ。だから、謝らせてくれ。そして、また隣で一緒に笑える関係になってくれ」

……うん、一夏。いつていることは立派だと思うぞ。でもな、それはどうにも告白に受け取られるぞ。

案の定、鈴と箒は顔を赤くしている。多分、一夏は怒らせたとか思っているんだろうな。

「一夏、お前というヤツは……」

「やっぱ、すごい残酷ね」

二人は、そう零した。

「まあ、いいわ。美鶴はどっちに付くの？」

「ただでさえ、一夏の勝ち目は少ないんだ。それを零にすることもないだろう。俺は一夏に付く」

「ええ、是非そうして。あんまりあつさり勝つのも味気ないわ。私は濃い口が好みなの」

「鈴。いつておくけど、俺にも意地がある。負けるつもりなんか、ないからな」

「それでも、私が勝つわ。私は強いから」

一夏と鈴は火花を散らす。そこで、時間切れ。休み時間の終わいだ。

「じゃあ、せいぜいがんばりなさい。箒、放課後にね」

「ああ、わかった」

鈴は教室を後にする。

「美鶴、俺が鈴に勝てる可能性は？」

「今の段階だと、十回に一回勝てれば運がいい」

「なら、その運を対抗戦の時に持つてくるだけだ。美鶴、俺を死ぬ気で鍛えてくれ」

その、強い決意が宿る瞳に俺は応えた。

「上等だよ」

そして、決戦の日がやってきた。

第二アリーナでは、観客で埋め尽くされていた。これも、ウワサの新生生同士の対決という宣伝効果のためか。

一夏と鈴は、すでにISを展開し、試合開始を静かに待っている。

「どちらが勝つと思いますか？」

そう、セシリアが尋ねてきた。ちなみに、セシリアにも事情を話し訓練に付き合ってもらっている。

ここはピットルーム。俺、セシリア、箒はそこから試合を観戦していた。同じく、千冬と山田先生もいる。

「実力差で考えれば、鈴だ。数週間訓練した程度で代表候補生に勝てるとは思えん。機体差でも鈴。普通に考えれば射撃武器がないってことはないから、近接武器しかない一夏には不利だ。唯一の勝機は一撃の大きさ。あいつのバリアー無効化攻撃を上手く当てられるかどうかだな」

「妥当ですわね。訓練でも、一夏さんのわたくしに対する勝率はほとんどありませんでしたわ」

一夏はセシリアの銃撃の雨を潜り抜け、セシリアに刃を届かせたことがほとんどない。たまにあったとしても、次の瞬間にはエネルギー切れでよくて引き分け。それは機体の愛称が悪いということもあるが、それでも、それが一夏の今の実力だ。一夏の実力は格段に上がってはいるが、それでもまだ遠い。

「だが、あいつは土壇場で何をするかわからん。一夏の突拍子もない行動。それが勝負の力ギだな」

と、箒はいった。

「一夏に肩入れするのか？」

「ただの正当な評価だ。セシリアの時もそうだったが、あいつは時機を絶対に見逃さない。一種の才能だな」

それは、主人公補正という。

「それを除いても、勝つのは鈴だな」

「なるほど。……賭けるか」

「教師の前で、堂々と賭け事をするな」

千冬が、こちらを睨んでくる。

「織斑先生はどっちに勝って欲しいんですか？」

「教師がどちらかに肩入れするわけにはいかん。ただ、篠ノ之」

「なんでしょうか？」

「それは、私としてもだ。お前や鳳がどのように戦い、それがどんな結果になろうと私に文句はない」

最後に選ぶのは一夏だがな。と千冬はいった。

「……ええ、わかりました。ですが、あなたもいずれは乗り越えるべき壁だということは、変わりません」

「楽しみにしている。さて、始まるぞ」

山田先生のアナウンスとブザー。それを合図に、一夏と鈴は空中でぶつかり合う。

雪片式型と巨大な青龍刀の剣戟。

鈴のIS、甲龍は近接パワー型のISだ。その点で見れば、一夏と同じ。ただ気になるのは、スパイク状の非固定浮遊部位だ。あれが、鈴の切り札だろう。

勝負は予想通り、鈴優勢で進む。二本の青龍刀を連結しバトンの

ように回転させながら力で攻めると見れば、次には分割し二刀流の手数の多さで攻める。

それだけならば、まだいい。

それに徒手空拳の打撃も混ぜてくるのだ。近接攻撃の多彩さなら、俺以上だな。

一夏は大分マシになったとはいえ、まだ不慣れな空中戦で攻めに回ることができない。それに比べ鈴はさすが、空中だろうとお構いなく、箒に使って見せた独特の移動方法で一夏を逃がさない。

「あれって空中でもできるのか。足場があること前提じゃなかったっけ」

かつて見た動きを思い出す。それは鈴よりもさらに静かで速く、縦横無尽で動き回っていた。それは、今の俺でも満足に捕らえられないかわからない。

「ISはイメージで動く。鈴が強く心に思えば、決して不可能ではない」

「なるほど、ね。まいったな、勝ち目が薄くなってきたぞ」

それは、一夏も同じ気分だろう。数回とはいえ、一夏もあの動きは見たことがあるはずだ。なら、その厄介さは十分わかっていているだろう。

一夏が大きく後方に飛んだ。一度距離を取り、仕切りなおすつもりだろう。

その瞬間、一夏が飛んだ。

「なんだ？」

自分で飛んだのではない。何かに殴り飛ばされたかのような。
見れば、鈴の肩アーマーがスライドして開いている。どうも、鈴
が勝負に出たようだ。

「あれが鈴の切り札か」

「そうだ。衝撃砲。甲龍の第三世代専用武装だ」

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体
を砲弾にして撃ち出してるのですわね」

「見えない銃弾か」

おそらく、ハイパーセンサーなら空間の歪みを感知し、砲弾を見
つけることができるだろう。だが、その瞬間には一夏に命中してい
るというわけだ。それでは、先手は取れない。

射撃武器に対する対応を教えなかったわけではないが、それは砲
弾が見える場合だ。見えないのでは、さすがに対応の仕様がな

「空気の流れを肌で感じられればいいんだろうけど、まだ一夏には
無理だな」

それは、鍛え上げられた感覚。第六感ともいう感覚だ。それを持
つには、一夏はまだ鍛えたりない。俺でも、まだ完全ではないのだ。

「けど、一夏さんの眼はまだ死んでいませんわ」

その眼は、今だ勝利を諦めてはいない。どこまでも真っ直ぐに、
鈴を見ている。

「一夏のヤツ、勝負に出るみたいだぞ」

一夏が加速体勢で、雪片式型を構える。瞬時加速を使つつもりだ

ろう。その速度は、おそらく鈴の速度すらも上回り、使い方を間違わなければ鈴でも妥当できるだろう。

問題は、それが直進的な動きしかできなく、途中で軌道を変えることもできないことだ。一度見切られれば銃撃の餌食。セシリアに負け越しているのも、それが原因だ。

なので、使うとしたら最初の一回。ここで外したら、本当に一夏に勝ち目はなくなる。

「うおおおおお!!」

一夏が叫び、加速した。だが、遅い。ただ闇雲に突っ込んでいくだけだ。その一夏を迎撃しようと甲龍の肩アーマーが点滅し、

一夏が消えた。

一夏が瞬時加速を使ったのだ。加速体勢も、真っ直ぐ突っ込んだのも、すべてブラフだ。最初からこれを狙っていたのだろう。鈴に勝負に出ると見せかけて、その実は考えなしの直進。そこで、鈴の思考に期待外れという一瞬の空白を作る。そして衝撃砲が放たれるタイミングで、その懐に潜り込んだのだ。

鈴に刃が届く。そう思った瞬間、

スドオオオオオッ!!

アリーナ全体に、大きな衝撃が走った。アリーナの中央にもくもくと煙が上がる。

その中心には、全身装甲のISが立っていた。

「なんだ、あれ？」

どうも、アリーナの天井を破ってきたみたいだな。ってことは、その火力は推して知るべし。

「一夏、あたしが時間を稼ぐから逃げなさい」

「逃げるって……女を置いて逃げられるか」

「馬鹿！ アンタより私の方が強いでしょう！ それに、今のでエネルギーを大分消費しちゃったでしょ！」

あの衝撃が走る瞬間、意識がそちらに向いていたようで、ほとんどが鈴の取った行動を見ていない。

「鈴だって、左手が動かないんだろう！」

鈴は一夏の攻撃が当たる瞬間、自分に衝撃砲を撃ち込んだのだ。至近距離からの衝撃砲で強引に攻撃を避けると共に、その勢いで一夏を中心に円を描くように動き背後から青龍刀を叩き込んだのだ。もともと、乱入のせいで完璧な一撃ではなく、浅いものになっていた。そうでなければ、一夏はエネルギー切れで動くこともできないだろう。

それでも、だ。瞬時加速、バリアー無効化攻撃とあわせて、エネルギーが大きく減少している。一夏はすで、満足に戦える状態ではない。

それは、鈴も同じ。その結果として鈴が払ったものは安くはなかった。衝撃砲のダメージで左手が満足に動かないようだ。

「っ！？ 一夏！」

鈴が一夏を蹴り飛ばす。その反動で、鈴も背後へと飛んだ。次の瞬間、その場が熱線で砲撃された。

「ぼけつとしないで！ 死にたいの！」

「悪い、鈴」

「いいから、来るわよ！」

鈴と一夏は、謎のISから距離を取るように飛んだ。それを追うようにビーム兵器が襲い掛かるから、接近戦主体の二人では攻めあぐねてしまう。

衝撃砲も、満足に狙う暇がない。

「織斑くん！ 鳳さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！ 今すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

「いいえ、俺たちで食い止めます」

それは、おそらく観客が避難するまでの時間を稼ぐつもりなのだろう。それは必要な行為だし、それができるのは一夏たちしかない。

「いいな、鈴」

「ああ、もういいわ。どうせ逃げろっていつでも聞かないんでしょ。あたしが衝撃砲で援護するから、アンタが突っ込みなさい！」

「了解！」

そういうと、一夏と鈴は戦いを始めた。鈴が衝撃砲で敵の注意を引き付け、その隙に一夏が斬りかかる。実に単純で、おそらく現状、もっとも効果的な作戦だ。

「もしもし、織斑くん！ 鳳さん！ 聞いてますか！？」

山田先生が懸命に通信で呼びかけるがまったく反応がない。

「本人たちがやるといつているんだ。やらせてみてみたらどう？」

「お、織斑先生！ 何をのんきなことをいつてるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、先生。それ塩ですけど……」

どうも、千冬もかなり動揺しているようだ。さすがの千冬も、弟のこととなると正気でいられない。

「はあ」

と一息吐く。

「千冬、落ち着け」

千冬の頭を抱くように胸に押し付ける。

「美鶴……」

「大丈夫、とはいわないがしばらくは墜ちない。いいから、今できることをするぞ」

「ああ、わかった」

一度、強く俺の服を掴むと千冬は身を離す。すると、そこには何時もの千冬がいた。

「山田先生、現状の報告を頼む」

「あ、あの？」

「山田先生」

「は、はい！ 突入部隊の編成は完了しています」

「なら、なぜ突入させないのですか！」

箒が千冬にすごい剣幕で詰め寄った。

「無駄ですわ。遮断シールドがレベル4で設定されています。扉もすべてロック済み。これでは手の出しようがありません」

端末をそうさしていたセシリアが、第二アリーナのステータスチェックを表示させる。

「システムクラックはつと。ああ、ダメだな。すぐに解除できるレベルじゃない」

しかし、これはあのISからシステムを乗っ取られたからだとして、どうも見たことがあるやり方だ。これは、あのミサイル事件の時のバカウサギの手法に近い気がする。

つまり、そういうことだ。

「なら、せめて私を突入隊に入れてください」

「ダメだ。半人前の生徒に任せられるか」

「箒さん、落ち着いてください」

「ああ、わかってる。わかってるさ！　しかし、ただ見ていることなどできない！」

ダン！　と壁に拳を叩きつける箒。

「セシリア。お前は代表候補生で専用機持ちなのだろう。戦おうとは思わないのか！」

「わたくしのブルー・ティアーズは多対一の戦闘向きなのです。それに、満足に連帯訓練もしていない状況で、突然部隊に入っても邪魔になるだけです」

「なら、他に打開策は！ 何か私にできることはないのか！」
「箒、お前の戦場はここじゃないぞ」

焦る箒に、俺はいった。静かに、いった。

「ここに、お前の戦場はない」

「美鶴、何を……」

「俺たちは、俺たちのできることをしている。箒、お前のできることはなんだ。お前の戦う場所はここなのか？」

「私の、戦う場所？」

「そうだ。お前は、この状況でどうやって戦うんだ？」

「私の戦う場所、私の戦い……」

そう自分に問うように呟く箒。

そして、何かを思いついたようにピットの出口へと走り出した。
と思ったら立ち止まり、こちらに振り返る。

「美鶴、私は戦うぞ」

「そうか」

「そうだ。だが、私にはそれが精一杯だ。だから、何とかしてくれ」

「何とかってなんだよ」

「何とかだ。お前ならできるだろう」

「買いかぶり過ぎだな。俺にもできないことはある」

「だが、これはできることだろう」

と箒は笑った。そして

「任せたぞ」

そして、箒はピットから出て行った。

任せる、か。どうやら、俺は箒に任せられたようだ。

頼まれたんじゃない。任せたんだ。

これは、大きく意味が違う。

箒は、自分が無力な存在だと考えて俺を頼ったのではない。自分も戦うからこそ、お前も戦えと叱咤したのだ。

「まったく。本当に女つてのは成長が早いな」

俺は箒を見送りながら、そういった。

「セシリア、一夏に通信取れるな」

「それは、できますが」

「なら、一分だ。一分だけ稼ぐようにいつてくれ」

「わかりました」

何も聞かず、セシリアは頷いた。

「千冬、三年のクラックチームに作業を中止するように伝えてくれ。第二アリーナ付近のコンピュータへのアクセスも全部中止だ。それと、救助チームを観客席の出入り口付近に配置」

「わかった」

千冬も、文句一ついわずに通信をしてくれる。

「美鶴。一夏さんに伝えましたわ」

「わかった。セシリア、行くぞ」

「わかりましたわ」

俺はセシリアを連れ立って、目的地へと向かう。
今の手持ちはナイフ二本、ワイヤー数メートル、リボルバーか。

これだけでは心持たない。だがやるしかない。
いや、やるのだ。

「まったく。おもしろくなってきたな」

「ええ、本当ですわね」

セシリアと、二人で笑った。

「二人とも、どこに行くんですか!？」

山田先生が、驚いたように叫んだ。一人、状況が飲み込めてないのだ。

だが、それは俺たちも同じだ。

すべての状況を理解しているわけでもない。ただ、やるべきことだけがわかっていただけだ。

「決まってるだろ」

戦いに行くのだ。

負けられない理由（前書き）

今回は少し長めです

あとご都合主義があると思うので、そういう展開が嫌いな方はお気を付けください

負けられない理由

「鈴、あの動き見て何か気づかないか」

「ええ、おかしいわね」

俺はあのISと戦う中で、ある違和感を持っていた。

あのISは強い。十全な状態ではないとはいえ、俺と鈴が二人で挑んでも勝ち目が見えないのだ。

いや、そこまで自分の強さに自信があるわけではないけれど。確実に鈴には劣るし、事実、あのISの乱入がなければ俺は負けていた。

そう考えれば、あのISは俺を救ってくれたとも考えられるが。とにかく、あのISはおかしい。

「あれ、本当に人間が操縦してるのかしら」

鈴が口にした言葉。それこそ、俺が感じていた違和感だ。

戦いにおいて、まず大事なのは相手の観察だ。

どういう動きをして、どういう手段を用いて、どういう考えで戦うか。

それは向上心かもしれないし、好奇心かもしれない。憎しみや怒りかもしれない。美鶴は戦ってもつまらないからと、そんな理由を嫌ってはいたが、理由は理由だ。

そしてそれは、直接対峙すること始めて感じられる。

だが、それは戦いにおいて命取りにもなる。自分を知られるということは、それだけ自分の付入る隙を教えるということだ。だから、自分の心を隠し考えを悟らせないのは戦いの常套手だ。

美鶴は戦いを楽しむという感情を隠さずに戦うが、それはつまり、その感情だけで他の考えを隠してしまうのだ。細かなことを、大き

なもので包んでいるのだ。

千冬姉は、その逆。静かに戦う。自分の心を氷のように、自分の闘志を氷のように。本当に冷たく、火傷してしまうようなほど冷たい氷にして戦う。だから、自分の考えを読ませない。氷で、自分の感情を凍らせているからだ。

だが、あのISは違う。あれは無だ。最初から何も無い。戦うことが戦う理由だともいうように、理由と手段が同じ。喜びでも怒りでも哀しみでも楽しさでもない。感情が、欠落しているのだ。

「美鶴は気づいてるのか？」

「それはないわ。多分、モニターからじゃわからないわ。こうやって相手しているからこそわかるのよ」

俺たちが言葉を交わすと、ISの攻撃が止んだ。先ほどからそうだ。まるで観察するように、こちらを見ている。

それはまるで、

「ロボットみたいだ」

「でも、それはありえないわ。ISが操縦者なしで動くなんて、ありえない」

「そうだな。だけど」

だけど、だ。自分の中の自分が叫んでいる。

「あれは、無人機だ」

「ええ、そうね。常識と感情、どっちを信じればいいのかしら」

「答えが出るのに質問なんてするなよ」

「ええ、そうね」

そつだ、答えなど決まっている。

俺は、戦士だ。セシリアにも鈴にも千冬姉にも美鶴にも勝てないけど、俺は戦士だ。なら、戦うのだ。

感情のままに、戦うのだ。

「あれが無人機なら、全力で攻撃ができる」

雪片式型の威力は、対人相手には高すぎる。だが無人機なら、話は別だ。

手加減抜きで攻撃できる。

「それが最善か。でも、当てられるの？」

「当てる。鈴、協力してくれるか」

「いいけど。何するの？」

美鶴の通信を受けてから、もう三十秒が過ぎている。

「仕掛けるのは一分丁度。俺が突っ込むから、鈴は衝撃砲を最大で撃つてくれ」

「何考えてるかわからないけど、了解」

と鈴は頷いた。

正直、不安はある。エネルギーや機体ダメージ。それが、思ったより深刻なのだ。零落白夜を一回でも撃てば、それでエネルギー切れ。一撃に決めなければ、それで終わりだ。鈴には心配をかけないように黙ってはいるが、分が悪い。

こんな時、美鶴や千冬姉ならどうするのかと考え、やめた。考えるまでもなく、あの二人ならこんな危機、危機でもないだろう。

なら、考えるだけ無駄だ。玉砕覚悟。せめて、鈴が逃げて観客を

助けるだけの時間を稼ぐ。

それが、俺にできることだろう。

俺は早速突撃姿勢に入る。その瞬間、

「一夏あつ！」

ハウリングが尾を引くほどの大音量で、箒の声が聞こえた。

「いいか、私が見ている前で恥じを晒すなよ！ 男なら、戦士なら！ これくらい戦い、笑って乗り切れ！ どうせお前のことだから、自分の身を犠牲にしてみんなを助けようとか考えているのだろう。ふざけるな！ そんなこと私が許さん！」

なんてことを叫ぶ。

箒は俺の感情などお見通しらしい。

「鈴、お前もだ！ 自分の身を犠牲にして、一夏に攻撃をさせる隙を作ろうなんて考えるな！ 私は、お前たちを失うなんて絶対やだぞ。いいか、怪我でもしたら泣くからな！ 年甲斐もなく大泣きしてやる！ そんな恥ずかしい思いはしたくないぞ！ だから勝て！ 鈴！ 一夏！」

なんて激励か我侭か文句か、判断に困るようなことを大声で、泣きそうなほどの大声で叫んだ。

「まったく、こっちの考えは丸わかりか」

鈴が、肩をすくめる。そして、苦笑いをした。

「鈴、お前……」

「はい、ストップ。いっておくけど、お相子よ。最初に一夏がバカなこと考えたんでしょ。顔に考えが出るのよ。まったく、あんたはどこの主人公よ。かっこ悪いわね。今時、自分の身と引き換えに女の子救うなんて流行らないのよ」

なぜか怒ったように、鈴はいった。顔を赤くして、自分の恥ずかしさを誤魔化すようにだ。

きつと、鈴のいった言葉は自分自身に言い聞かせるためのものでもあったのだろう。

「箒、怒ってたわね」

あと、十秒で一分だ。

「ああ、そうだな」

九、八。

「どうする？　ここで負けたら、箒は泣くらしいわよ」
「それは困るな。男として、女を泣かせるのは嫌だ」

七、六。

「それじゃ、どうするの？」
「決まってるだろ」

五、四。

「ええ、そうね」

三、二。

「勝つわよ、一夏!」

一、零。

「もちろんだ!」

瞬間、観客席から爆発が起こった。

癪癪席はと通じる扉が破壊され、救助チームが突入したのだ。迅速に、観客たちはアリーナより待避する。

敵ISは、そちらに興味を持ったようにそちらを向いた。

このままでは、観客に攻撃されるかもしれない。

だがそれは、自分より意識が離れているということだ。

仕掛けるなら、今しかない。

俺は突撃姿勢になり、ISに向かい加速した。それと同時に、鈴が衝撃砲を放つ。

「一夏、行きなさい!」

「おう!」

その衝撃砲を背に受け、そのエネルギーを取り込む。白式に瞬時加速をするだけのエネルギーはもう残ってはいない。残ってないなら、他からもってくれればいいだけだ。

背中に重い衝撃を感じ、そして、一気に加速する。

雪片式型に、エネルギー状の刃を形成する。

ISまでの距離は、あと僅か。

勝てる。そう俺は確信した。

その瞬間だ。

背後のスラスターが爆発した。急激に、速度が落ちるのを感じる。

やはり、悪い予感が的中した。

鈴から背後に受けた一撃が原因だ。それが、衝撃砲を受け無理に瞬時加速を行ったせいで限界が来たらしい。

頼む。あと少し、あと少しなんだ。届け、届いてくれ！

だが、届かない。あと数歩が届かない。

敵ISが俺を殴ろうと右手を構える。

その時だ。

観客席から、二つの飛行物体が飛来した。

おかしい。観客席とアリーナは遮断シールドではさまれていて、向こうからは手出しができないはずだ。なのに、飛行物体はアリーナから向かってくる。

それは、よく見ると見覚えがあるものだった。

ブルー・テイアーズのビットだ。

そして、すべてがわかった。

美鶴だ。美鶴がどのような手段を使ったかわからないが、遮断シールドを解除したのだ。

ビットは、真っ直ぐと敵ISへと飛来する。だが、ダメだ。ビットのレーザー射撃では、このISのシールドを貫いて破壊することは無理だ。シールドを貫くには、雪片式型ではなければ無理なのだ。俺の考えを裏切るように、ビットは真っ直ぐと飛んでくる。真っ直ぐと飛んできて、

背後より、敵ISを通り過ぎた。何もせずに、通り過ぎたのだ。だが、それで全てが終わった。

敵ISは何故かバランスを崩すと一歩、一歩だけこちらに倒れるように踏み出した。

「うおおおおおおー！」

だから、俺も踏み出す。最後の力を振り絞り、一步だけ踏み出した。

そして、雪片の刃が、ISの胸を貫いた。

「お見事ですわ」

そう、セシリアの声が聞こえた瞬間だ。敵ISの頭部を、レーザーが貫いた。

敵は時が止まったように動かなくなり、地面へと倒れた。それは、やはり観客席からの狙撃。

見ると、そこにはレセシリアがレーザーライフルを構えていた。俺のシールドエネルギーはすでに空だ。絶対防御があるとはいえ、この距離で爆発されたら怪我は免れない。

だから、正確に頭部を撃ちぬいて爆発を最小限にして敵の動きを止めたのだ。

さすがは、セシリアだ。その狙撃の腕には、感嘆しかない。

「それにしても、終わった……」

敵ISの再起動を確認！ 警告！ ロックされています！

「!？」

左腕を最大出力形態に変形させたISが、地面より俺を狙っている。

マズイ！

そう思うが、すでに白式は少しも動かない。ビームが迫り来る。視界が白に染まる。

「まったく、世話が焼けるな」

その声がした瞬間、一発の銃声が響いた。

それだけ。それだけで、俺をロックしていたISの腕が動いて、光は空へと消えた。

そして、今度こそISが動かなくなつたのを確認すると、俺は意識を手放した。

狙うのはただ一点。

精神を研ぎ澄ませ、意識を集中する。

銃を抜き、構え、撃つ。

それだけの動作。ただそれだけの動作を、信じられないほどの速さで行う。

全部で六発撃った弾丸の発射音が、一発分しか聞こえないほどの速度。

それほどの速さだ。

撃たれた一発は狙い通り、一点。ISの左腕の一点だけに命中する。

そして、一夏を狙っていたはずの左手が反れた。僅かにだが、それだ。

そして、放たれたビーム兵器が空へと消え、左腕が力なく地面についたところでやっと息を吐く。

深く、深く息を吐く。

それから俺は

「気絶したのか。情けない」

と笑った。

「最後の最後で油断しやがって。少しでも調子に乗るとミスをする癖はどうにかしないとな」

一夏に近づき、意識がないのを確認するとため息をつく。
大丈夫だ。呼吸は安定している。気絶したのは、緊張の糸が切れただからだ。怪我も、打ち身が数箇所というところだろう。

「白式はつと。これはしばらく使い物にならないな」

やはりスラスターの損傷が激しい。事故修復にはどれくらい時間がかかるだろうか。

「最後の最後でいいとこ取り？ それはないんじゃないかしら」

「一夏が未熟なのが悪い」

ISを解除した鈴が、呆れた顔で近づいてくる。
だが、よく見ると足取りが覚束ない。鈴も、かなり消耗しているようだ。

「まあいいわ。それにしても」

と観客席を見回す鈴。

「よく遮蔽シールドを解除できたわね」

「解除？ そんなことしてないぞ」

「は？ なんならこのアリーナに入れたのよ」

「壊した」

「はい？」

鈴が訳がわからないという顔で聞き返すからもう一度くり返す。

「このアリーナへのエネルギー供給ケーブルを壊した」

アリーナの遮蔽シールドも、タダで動いているわけじゃない。ケーブルを通じて、学園のエネルギー供給施設からエネルギーを持ってくる必要があるのだ。

その大本、ケーブルの密集地点を壊した。

入学前にこの学園の見取り図は頭に叩き込んでいたから、その場所を探すのなんて簡単だ。

収集地点をナイフで分解し、切断する。訓練で行った爆弾処理に比べればなんということはない。ただ壊せばいいのだから。

エネルギーさえなくなれば、どんな優れた装置もただのゴミだ。ハッキングチームに中止命令を出したのも、一応の予防策。エラーで面倒が起らないようにするためだ。

「ああ、いいわ。あんたらに常識が通用しないのは今更ね」

どこか達観したような鈴。そして

「つと。大丈夫か？」

「ありがとう。さすがに、疲れたわ」

倒れそうになる鈴を、慌てて支える。華奢な体が、俺に押し掛かる。

「なによ？」

「いや。もっと鈴のスタイルがよければ役得なのに、と考えたただだ」

「殺すわよ」

「ははっ。鈴はそのままでも十分かわいいから気にするなよ」

すると鈴は顔を赤くして、やはり怒ったように、

「やっぱり殺すわ。でもその前に少し休む」

「ああ、おやすみ」

そこで、鈴も意識を手放した。

俺は気持ちよさそうに眠る鈴の寝顔に苦笑すると、背中に抱きかかえる。

やばい。胸が当たってるよ。小さいのも案外悪くないな。

「まったく、かわいいな」

「あら、それは聞き捨てなりませんわね」

セシリアが飛んできた。俺の目の前に降りると不満そうに、

「美鶴はそういう子供っぽい体系のほうが好みなのですか。不健康ですわ」

「アホか。鈴は手のかかる妹だ。なんだ、なにか気に食わないことでもあるのか？」

「ええ、もちろん」

顔をかわいらしく歪めると、俺に詰め寄るセシリア。どうもご立腹のようだが、それがどうしようもなくかわいい。

「わたくしだって、一夏さんを助けるために神経を使う狙撃を成功させたましたわ。それ以前に、あのISのバランスを崩したのはわたくしです」

もとは俺の策だけだな。

ビットではシールドがある状況では力不足だが、独立して動けるというだけで取れる手段は格段に増える。

そこで俺は、ワイヤーを使うことにした。

二機のビットにワイヤーを括り付け、それを引っ掛けることで相手のバランスを崩す。

あの程度の強度のワイヤーで、さすがに地に腰をつけさせることは不可能だ。実際、ISに少し接触しただけでワイヤーは切れてしまった。

それでも、どんな小さな力でも、不意に押されれば多少なりとも体勢を崩す。

それに、力は弱いだろうが速さはある。

速さと不意打ちをあわせた結果が、あれだ。

結果は十分だろう。

「それなのに、わたくしには何の言葉もないんですの？　鈴さんにはかわいいだなんていって」

「拗ねてるのか？」

「はい」

やはり眉を寄せて、それでもかわいらしくセシリアはいった。

それにやれやれ、と俺は笑みを零す。

「何がおかしいんですの！」

「いや、かわいいと思ってさ」

「そんな取ってつけたような言葉は要りませんわ！」

「じゃあ何が欲しいんだよ」

それに、セシリアは顔を赤らめると小さな声で、

「……さい」

「ん？」

「わたくしと、今度の休みにデートしてください」

そんな言葉を、すごい恥ずかしそうにいうセシリア。

少し前に、それどころかつい先日もそれ以上に恥ずかしいことを。ちよつと十八歳未満はお断りなようなことをした仲だというのに。

セシリアは恥ずかしそうに、眼を潤ませていった。

「ダメ、ですか？」

こちらの機嫌を伺うように、セシリアはいった。その言葉に、

「断れるわけ、ないか」

「それじゃあ……」

「いいぜ。今週の日曜だな。せつかくだ。セシリアの料理の腕がどれくらい上がったか見せてくれよ」

「はい！」

俺たちは鈴を医務室に運ぶ間、ずっと週末の予定について話し合った。

一夏は、アリーナに置き去りにしてきた。だって、男なんて背負いたくないからな。

負けられない理由（後書き）

次の話で一巻は終了です
やっとここまでできたか……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3918x/>

IS-戦いを求めるもの

2011年11月10日06時24分発行